

小田原史談

第 187 号

発行所 小田原史談会
小田原市栄町2-13-20
アオキ画廊内TEL(24)0637

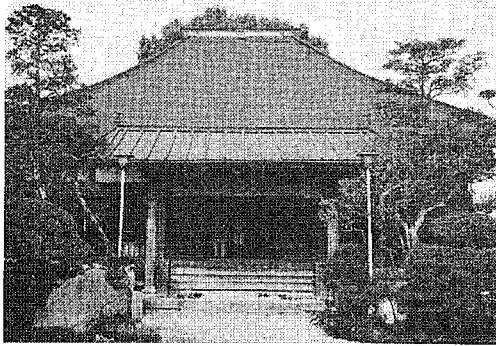
市川一郎さん編集の写真集と

本立寺の板絵

光瑞山本立寺
天蓋と格天井 写真集

これは市川一郎さんが、平成十三年九月に手作りで完成させた、八冊限定という稀少の写真集です。

光瑞山本立寺は小田原市千代にあつて、応永十一年(四四)開山以来、現住職は第四十七世となる日蓮宗の古刹です。昭和五



▲改修前の本立寺本堂

十六年に、本堂新築に近い状態の改修工事が施行されました。左の俳画は、改修工事前の本堂の格天井に掲げてあったものです。格天井には、俳画や仏徳・祈願・漢詩を入れた絵などが、

一二六枚の板(杉・松・けやき)に納められてありました。改修工事の際、本堂は解体修理されて、取り外された格天井、すなわち板絵となりました。この中一枚です。これが大事に保存されてあることを聞いた市川一郎さんは、これを天蓋も含めて写真におさめ、実家に残しておきたいと思いつたということです。実家の祖先が、天蓋と格天井に深くか、わっていた事情がありました。

○発心のゆえん
市川一郎さんは曾我谷津の市川家に養子縁組みされた方で、実家は上曾我の徳田家(現戸主・清之氏)です。
一郎さんのおじいさんは市十



▲格天井の俳画 解説：内田 清さん

▼天蓋四枚組の絵 (重太郎おじさんが描いたという伝承)



※年毎糸 やさしうなり怒 嫁可君 波多野利三郎

郎といって、上曾我で紺屋を営み、本立寺の妙見堂の天蓋と格天井を寄進されました。(安政の頃)重太郎という弟がいて、江戸で絵の修業をした、ということ

です。
徳田家では、妙見堂の絵(天蓋と格天井)は、重太郎が描いたという伝承がありました。一郎さんも母から「家の先祖が妙見堂の絵は、重太郎おじさんが描いたもの」と聞かされ、記憶していたとのこと。

一郎さんは、家の祖先の仕事を写真にとつて、本家に残しておきたい、と思立ち、八部限定の写真集となりました。世間に見せる写真集ではなく、お寺・本家親族に祖先のしてきた仕事を残す写真集といえて、これが本意です。

祖先の社会的貢献性をひき出し、この伝承のてこ入れをした



一郎さんと理解し、若輩の私のよき手本となりました。

○板絵

格天井にあつた二二六枚の板絵の中に、「明治己亥」(上掲)があつて、明治三十二年頃に活

躍された方々の作品であることがわかりました。

したがって、前述の「格天井の絵は重太郎おじさんが描いたもの」ではないといえます。一郎さんは板絵の中に「写」という字が見えることから、「昔の妙見堂の格天井の絵(重太郎作という伝承)を模写したとも考えられる」ということです。

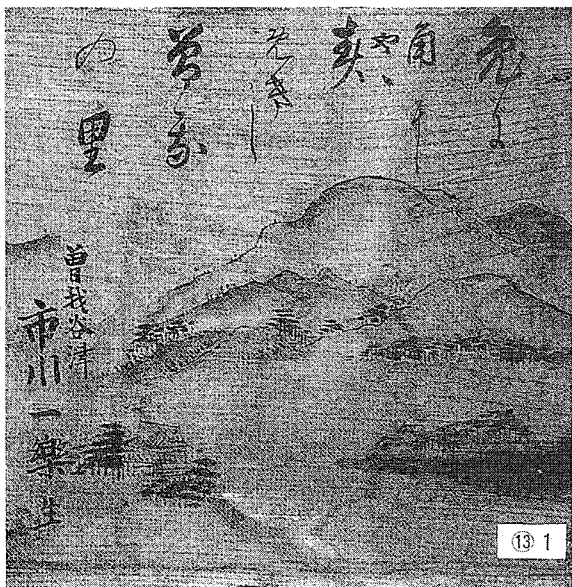
この年代に本立寺では、壇信徒に板絵のお布施をよびかけ、本堂の格天井の造作をなしております。これに応じた方々の居住地を、左記の「板絵・各地区の枚数」にまとめてみました。(一人が二枚もいました)地元の千代が最多で、同心円的に周辺の地区に拡がり、壇信徒が呼応しております。近郷近在と横浜・東京・不

明を含めて総数二十六という、広範囲の地区に及んでいます。これは本立寺の壇信徒の分布範囲ともよみとれます。

一二六枚の板絵を通して、応募者の豊かな文化生活の営みを知らされました。生業だけでなく、余力をつくり、俳句や絵画・漢詩などをたしなむ生活、趣味を楽しむ生活、そして自分の文化性を高めている生活を、垣間見た思いです。

生業に伴う経済生活は、現代とは隔世の感があり、一般的に豊かではなかったかと思えます。けれど、板絵の世界は心豊かな方々で、元氣一杯、気合むんむんを思いました。あやかりたい姿勢です。

この写真集は、一郎さん「白寿の年」の記念といえます。一郎さんは明治三十五年(二九三)一月生まれです。ワープロにない字を作り、自力で完成した写真集です。この気迫・達者は、青年に相当します。万年青年の彌栄を祈念して、欄筆します。(石綿 勉)



※兎角耳 や、春免ぎ之の 曾我の里 市川一樂生

板絵・各地区の枚数

千代田	17	曾我	7	津原	7
高野	8	曾我	1	原我	1
永東	4	曾我	3	岸我	3
西大	7	曾我	6	我曾	4
中府	3	曾我	4	上大	1
鴨宮	3	上松	1	井村	6
新田	1	福沢	1	村村	1
成中	8	声村	1	色色	1
小国	5	中横	1	浜京	2
曾我	4	東不	3	明	3
小計	11		7		7
	83	小計	43		

※表記、そのものの地名です。

小田原の郷土史再発見

日本最古の水道は、早川上水か、小田原用水か

石井啓文ひろふみ

前号と前々号で、早川上水が日本で最初の水道であること、文献を基に論述してきた。一部書籍に、早川上水は堀に引水するのが目的であったとして、日本最古の水道から除外する論調が見られる。これまでも述べてきたように、早川上水は当初、東海道の真ん中を流れる小川であった。北条氏は何故道の中央に敷設したのだろうか。道の両側の住民に公平に水道

を利用させるためであろう。こうしたことからも住民のための水道と言えらる。

小田原市は、宮前町に「小田原用水」を復元するという。私は、日本で最初の水道であることを全国に知らしめるチャンスと考え、「用水」ではこの辺りは田圃であったのか。と思われかねない。再々「早川上水」とするよう提言してきました。

このことについて、先日お話を伺った宮前町の呉服店主山田彰夫氏を再度お尋ねし、ご指導を戴いた。

「確かに貴方の言われるように、史料は水道と書かれている

が、あ、した文章は法令用語とでも言えるもので、一般庶民は皆、「用水」と言っていたと聞いています。

北条氏の小田原用水を見た各大名が幕藩時代に上水路を敷設したこと、上水・水道の言葉が生まれ神田上水・玉川上水と呼ばれ、小田原でも公文書等では早川上水と呼ばれたのであろうが、庶民は「用水」と称していたのである。

これまで「早川上水」がどのように呼ばれていたかを調べたのが別表である。調査漏れについてはご指導頂きたい。

風土記は基より『明治小田原町誌』と昭和十一年(この年、小田原の近代水道が完成)発行の『明治以前日本土木史』は、当時の名称を用いているのであろう。同土木史は「小田原水道」をタイトルに、(一)書きと本文では「早川上水」としている。

中野敬次郎氏は、当時小田原水道と呼ばれていたことを知った上で、「小田原古用水」と使い分けたものと思われる。

「小田原用水↓早川上水↓小

田原水道」と呼称変化してきたと言えるのではないだろうか。

幕末から明治時代は、「小田原用水」・「早川上水」ともに死語化していたのではないだろうか。

既に、戦前(昭和初期)を知る人は明治・大正生まれの人たちで、「小田原水道」を知る人は稀ではないのだろうか。と、申し上げたところ、

「そんなことはない。小田原では北条時代から一貫して用水と呼んでおり、いわば、小田原方言とでも言えるのではないか。

貴方の言われるように全国的には「早川上水」であろうが、小田原では「小田原用水」である。「早川上水」としても「用水」を明確に記して欲しい」と、言われる。

方言とも言われるくらい「用水」が使われていた事実は、大切にしていきたい。私は小田原「こゆるぎ」が失われつつ、あることが惜しまれ、本史談で小田原の起こりと「こゆるぎ」考もまとめた。有形文化財に限らず、こうした言葉も貴重な文化財と考える。勿論「小田原用水」は、水道の原点を伝えるための貴重な固有名詞である。

しかし、これからの子供や孫、当地を訪れた人たちに、「用水」を用いて日本の水道の原点であったことを伝えるのは難しい。

国史大辞典・日本史大辞典とも

に、用水は田用水、水道は明治以降の近代水道を説明しており、「上水」で始めて小田原にも水道が敷設されていたことを説明している。当市以外の刊行物は、全て「小田原早川上水」としているのである。山田彰夫氏のように用水を知る人の言葉は大切にしたいが、後輩の私は小田原用水を知らず、史料のみを頼りに調べる欠点でもあろうか。お気持ちには理解できるがもう一つ首肯できない部分が残る。年齢差もあるのだろうか。おそらく、山田彰夫氏も同じ思いをされているのではないだろうか。

最後に、人の生活に水が欠かせないことから、その歴史は人類の誕生と共に始まったと言える。飲用水に水路を用いた始まりは、用水路も含めて北条氏時代よりずっと以前と考えられる。こうしたことから、早川上水を日本最初の水道とすることに躊躇がないわけではないが、町作りと同時に敷設された○○上水、××水道と固有名詞で呼ばれるものでは、当上水が最初である。

先日私の「きらめき☆小田原塾」の話聞かれた女性から、飯泉の取水堰を見学に行つたところ、日本最初の水道は「神田上水」という説明を受けたと言

「早川上水」の呼称

	呼称	著者または発行所	書名	発行年月
A	小田原用水	古文書	寛文12年板橋村明細帳	1672. 7
	小田原用水	古文書	貞享3年御引渡記録	1686.
	早川上水	江戸幕府(雄山閣)	新編相模国風土記稿	1836.
	小田原宿水道	片岡永左衛門	明治小田原町誌	1888. 12
	小田原水道(早川上水)	日本土木学会	明治以前日本土木史	1936.
B	北条用水	立木望隆・三津木国輝	あるく箱根・小田原	1977. 5
	早川用水	田代道弥	あるく・見る箱根八里	1991. 12
	小田原古用水・小田原水道	中野敬次郎	近代小田原百年史	1992. 10
C	小田原用水	小田原市水道部	おだわらの水 (小田原市水道50年史)	1986. 10
	早川用水	小田原市	小田原市史別編「城郭」	1995. 10
	小田原用水	小田原市都市計画課	公報「小田原」	2000. 12
D	小田原早川上水	堀越正雄	井戸と水道の話	1981. 2
	上水	(株)吉川弘文館	国史大辞典	1986. 11
	上水	(株)平凡社	日本史大辞典	1993. 5
	小田原早川上水	神奈川県企業庁	神奈川県営水道60年史	1994. 3
	小田原早川上水	堀越正雄	日本の上水	1995. 6

(注) (A) は、書かれた当時の名称と思われる。(B) は、当市の郷土史家の著述である。(C) は、小田原市の刊行物。(D) は、市外刊行物。また、(A) の古文書では、寛文12年が「小田原用水」の初見で、貞享3年以降は小田原宿内にその固有名詞は見られず、元禄16年(1703)以降古文書の文中では、全て「水道」が用いられている。

われ、その説明資料を送って頂いた。私は数日後、史談発表資料を添えて説明してきた。小田原市は勇気を持って、「日本で始めての水道」を全国に知らしめて欲しい。二十一世紀に育っていく人たちに、小田原北条氏の素晴らしい事績を伝えるには、

「早川上水」か、それとも「小田原用水」で良いのか？ 会員各位はどの様に思われるでしょうか。当市は住民参加の行政を目指しているという。是非、文化財保護課にご意見を寄せて戴きたく、お願い申し上げます。

小田原旧城及市街



明治十六年陸軍省発行の「小田原旧城及市街」地図。東海道と甲州道の大工町まで、道の中央に点線で「早川上水」が記されている。

レイテ戦の別れ

③ 最終回

かね 金子 中二

四、セブ渡航・レイテ戦場との別れ

師団司令部に帰りセブ渡航計画を聞く。「前に手配した師団の機帆船は、回航途中全部ネグロス島沖で撃沈された。そのため海岸で集めたバンカーで渡航することに決した。渡航日は四日夕とする。」とのことで、乗船区分と舟の割当が決まっていた。バンカー(丸木舟)は大きなのは十人乗りから、小さいのは二人乗りまで各種あり、長い間砂浜に放置されてあった



※右側が筆者

め、損傷のあるものが多く、今修理中とのことであった。残留組の隊長となった清水高級副官が病の為か、氣力を喪失しているように思われ、これが残留組の士氣に大きな影を落としていた。渡航する者も、残留する者も、ともに大きな危険が待ち受けているのであるが、渡航するものには、なお未来を切り開こうとする氣力が残っていたように思われる。ともに命を掛けた別れであるが、悲壯感というものは全くなく、日常の行動の中で別れていったのであった。既に生命を度外視した淡々とした別れであったのであろう。

一月四日夕渡航に当り、私が割当を受けたバンカーは、吃水の浅い内海用の二人乗りのもので、藤崎伍長と二人で乗っていることになった。この舟で果してこの海峡を渡り切ることができらるだろうか。軍の大発(大型の発動機艇)で行った方がよかったのではなかったか、等と考えながら、最後尾の位置を承わって出発した。出発して二、三十分後、波の高い沖に出ると、忽ち舷側を越えて波が舟の中に浸

入ってきた。水を掻い出す暇もなく、舟は見る見るうちに沈んでいった。幸い舟には両側にアウトリガー(舷の外側に付けた浮材)が付いているため、バランスをよく取っておれば、舟は転覆することもなく、胸まで水につかっても舟を漕ぐことが出来た。前の方の船団は既に闇の中に消えていた。時々敵の魚雷艇の打ち上げる照明弾が沖の方を昼間のように明るく照らしている。渡航中止の決心をすると半ば沈んだ舟を漕いで陸地に引き返した。

翌五日期、昨夜の渡航状況を調べた所、浸水のため途中から引き返した者が他に六名いた。小さな舟では外海の航海はとて不可能で、少なくとも十人乗以上以上の大きな舟を目標に、早速収集に取りかかった。夕方までに十人乗一隻を見付け出し、早速渡航の準備に取り掛ける。渡航人員を十名とし、新たに二名を追加する。セブ島渡航後物資を集める能力のある者、海に慣れている者を基準に人選する。

六日夕、第二回目の渡航を開始する。出発三十分、外海の荒波にもまれてバンカーの片方のアウトリガーが折れて舟は転覆し、全員海中に投げ出されてしまった。大きな舟を手に入れることの困難な現状に於いて、こ

の舟は大事な物である。舟を押し抱えて全員で岸に泳ぎ帰る。

七日朝、一日掛りで竹材を集めて両舷のアウトリガーを頑強に作り直し、水漏れを直しアカ取りを整え、帆走のため天幕を準備する。

八日、昼間海岸の塩焼小屋で、今夜の渡航の準備をしていると、軍の友近参謀長が立寄り激励の言葉を掛けていかれた。

一月八日は丁度私の三十回目の誕生日である。日本にいる両親・家族を思い無事成功を祈った。夕刻第三回目の渡航を決行する。暗闇の中に打ち上げられる敵魚雷艇の照明弾が光るたびに、身を伏せながら準備を整え、静かに西に向って陸地を離れていった。途中の敵魚雷艇の警戒は嚴重であったが、船中に身を隠しながら漕ぎ、ようやくにして敵の警戒区域を脱して沖の方に出ることが出来た。やがて帆走に移る。波が荒くなると老朽船の為か、折角修繕したのにどこからともなく海水が船底にたまってきて、全員交代で水アカの排出に勤める。私は小さな磁石と南十字星の光を頼りにし、セブ島タゴボン湾を目標に一路西に向けて舟を走らせた。長い夜の空が漸く白み始めた。前方にセブ島の山影が見える。周囲の海上に対する警戒の目を光ら

せながら更に進む。あたりはすつかり明るくなる。遙か左前方の海上に波しぶきを上げて立っている岩礁が見える。海図によればタボゴン湾の入口にある岩礁のようである。正面の海岸まで後二三軒、タボゴン湾に入るためには、進路を左前方に取り、岩礁近くから湾内に入った方が早いと考えながらも、万一、岩礁の間から敵の魚雷艇が出てくることも考えられ、そのまま直進する。少し岸に近づいた頃、海岸の後方の台上の森の前あたりが、何となく異状に感じられたため、眼鏡を出して見るが霞んではっきり見えない。しかしこれ以上陸地に近づくのは危険と、取り舵を一杯にきって進路を南に向ける。突然陸上から激しい機関銃と小銃の弾の飛んでくる音が聞えた。今迄議論し合っていた三塚・藤沢の両中尉の声が急に止まった。二人の体がガツクリと前に倒れた。他の者は一斉に海に跳び込んだ。私は船の進路を確認し船底に伏す。機関銃の音は更に激しく続く。操舵をしていた西尾兵長は取り舵を一杯にとった舵の上に倒れて仕舞った。船は大きく左に旋回しながら沖に向う。先に海に跳び込んだ者は左舷に集まり船を沖の方に引き始めた。私の背中が急に丸太棒で、

強く殴られたような衝撃を受けた。背中を撃たれたのだ。体は動かすことができる。飛弾の間を見て海に跳び込む。船は静かに沖に移り、銃声も段々と遠のいていった。一同再び船に乗り込み、一路タゴボン湾に向って漕ぎ出した。一時間後湾の入口に到着する。湾の入口には日本兵が見える。波は静かになる。今迄の緊張が緩んだ為か、背中の傷が傷み出した。しかし負傷して直ぐ海水に漬かったためか出血も少なく、その後の経過もよく、セブに着くまでその儘で行動出来た。しかしこれが原因で、数年後には脊椎分離症となり、昭和六十二年には脊椎骨折となり、脊椎の補強手術を行わなければならなかった。

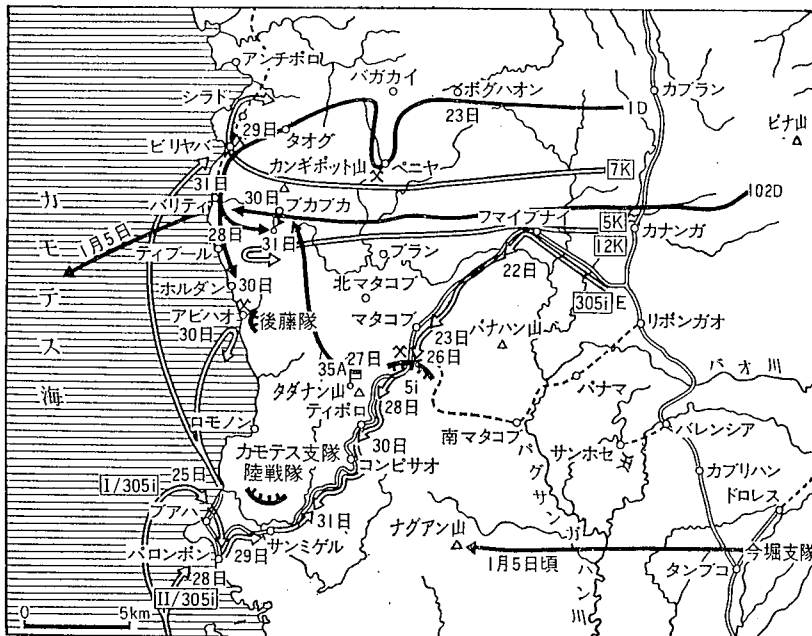
タゴボンの棧橋に着く。陸に上がった我々は、三名の遺体を船から降し、湾の奥にあった大きなマンゴの木の下に穴を掘り、その中に三人の遺体を並べて埋める。近くに咲いていたブーゲンビリアの花をその上にお供えする。守備隊の紙岡大尉以下居合わせた一同も参列して下さった。手を合せてお祈りする眼から、とめどもなく涙が流れる。今迄レイテ戦場で多くの戦死者に会い、また生死の別れに何度も出会ったが涙を流すことは一度もなかったのに。今こ

こで涙が止まらなかったのは、長い戦場の緊張の中から、平常の人間の感情に戻ったためなのだろうか。三人を埋葬したタボゴンの別れは、まことに身を切られるような物悲しい別れであった。

先に渡航された師団長・参謀長は上陸のときゲリラの襲撃を受け、二人共負傷してタボゴンの守備隊に収容されておられた。その後約八か月に互るセブの

戦闘を終り、二十年十月、セブの収容所からレイテ島タクロバン収容所に移され、更に二十一年三月タクロバン収容所を引揚げ、日本に帰国することになった。米軍のLSTに乗せられてレイテ島を離れるとき、一年有余に及ぶ比島各地の戦を思い、遠く離れて行くレイテの山々を眺めながら、何か心引かれる思いに沈むのであった。

(おわり)



ビリヤバ、パロンボンの戦闘(12月22日~1月5日)

江戸時代初期田島に穴居した

風外慧薫禅師

野地 芳男

風外慧薫禅師に関する書物は、既に多くの専門家・学者等により、古文書・記録書・研究書・小説等に記されています。しかし、風外禅師が、生涯で最も充実し、後世に残した達磨画・布袋画等の墨画は、この地―田島から上曾我―の穴居生活から描きだされている。

そのため、相模国の「成願寺―田島―上曾我」時代の風外禅師について、墨画・賛詩を軸に既刊書および伝承等を参考に、今一步踏み込んで風外禅師の思想・学識は、もとより画僧として、人物像を探ってみた。

特に、風外禅師は、空白時代が長く、古記録で信憑性のあるものが少ない、『日本洞上聯燈録』(享保十二年・一三三)、『画乗要略』(天保二年・一八三)、『名家略伝』(天保十二年・一八四)、および平塚市文化財保護委員・高瀬慎吾氏の『風外慧薫禅師とその作品』(昭和三十五年・一六〇)、真鶴町・松本敬氏の『風外慧薫の研究』(昭和四十五年・九七〇)西海賢二氏の『漂泊の聖たち』(平

成十二年・二〇〇) 更には郷土の歴史家・杉崎正五氏の記録等を参照すると共に、風外慧薫禅師による書画と時代背景より読み取ることとした。

一 風外慧薫禅師の名について

現在まで、世間では風外慧薫禅師を「穴風外」・「相模風外」(相模国に棲止したので)・「鎌倉風外」(鎌倉は相模の異称)・「腹立風外」更には「箱根風外」・「小田原風外」・「真鶴風外」とも云う。

これらの呼称は、風外と呼ぶ禅師が江戸時代に三人いた。即ち、風外慧薫と風外焉知さらには風外本高である。

いずれも江戸時代の人であります。三者の中では、風外慧薫が先人であり、単に風外禅師と申しても混同しやすく、上記のように慧薫禅師を当時住んでいた処や、特徴から種々の呼称で伝わりました。

風外慧薫禅師の名であります。風外とは「字」である。「字」とは、実名以外の名です。

江戸時代には、実名のほかの名で呼ぶ事が多かった。勿論、申すまでもなく「字」は「渾名」

「諱名」と異なります。渾名はその人の特徴などによって、実名のほかにつけた名であり、あざけりの意味や愛称として付けたものである。

次に、慧薫とは、「諱」(忌み名)である。諱とは死後に、尊んでつけた称号である。したがって、風外禅師は生涯にて慧薫という名は使っていない。常に賛語にも風外道人として書かれている。

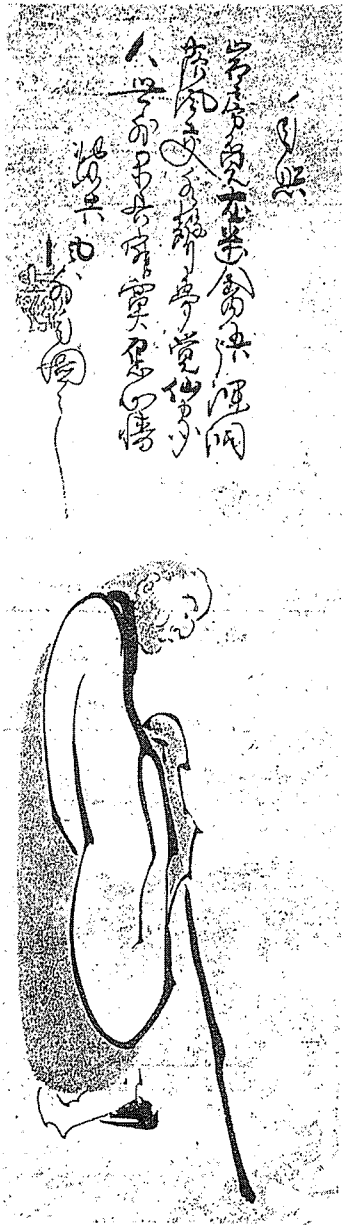
(註) 風外禅師は道人と記しているが、通常「道人」はどうにん・どうじんと呼び、一般的には仏門に入ってから得度した人を指す。

他方、道人には世俗の事を捨てた人、世捨人の意がある。風外禅師は、その行動から世捨人の意を用いて「道人」を印したと思う。この意見は後章で述べることにする。

次に、「慧薫」は諱であるが「慧」という名である。大雄山最乗寺の開山は、「了庵慧明」(二三三、四二) 更には、最乗寺四世「無極慧徹」であり、慧||智慧を意味した名を残している。

また、風外禅師が入山した「相模国成願寺」開山の法系では「梁屋慧棟」がおり高瀬慎吾氏の書には、相模耕徳山成願寺の開山と記されている。

了庵慧明は、上曾我の竺土寺の開創でもある。となれば最乗寺―成願寺―竺土寺は法系であ



る。となれば、「慧薫」という諱は、曹洞宗の立場から相当なウエイトで位置づけられたと思える。更に、明治末年の大雄山最乗寺主「彦竜道興」最乗寺住第六世は、風外禪師の画に次の讃語を贈っている。

咄這老人 道力忘功 垂跡三界 妙行六通 鬼髓頤指 現鉢中 除災与樂利群豪

すなわち、風外禪師を神通無礙の羅漢(仏教の修行者で悟りを開いた人)になぞらえている。以上の事柄からして、「慧」は般若智慧、この意は真理を認識して悟りを開くと云うことでもあり最高の「諱」を頂いているものと思う。

二 相模国小田原(田島・上曾我)の現在における伝承と評判

風外禪師については、地元田島の故老からは多くの事は伝わって来ない。最小限のこととして、杉崎正五氏から得たものである。

風外上人が田島の洞窟生活から墨画を描き始めていた。このことは、それ以前の風外画が残されていないからである。現在多くの専門家から、すばらしい評価をうけているにしては非常に残念である。

昭和の初期頃までは、風外禅僧描く墨画が、あちこちにあつたと伝えられていた。特に根岸・丹沢地区あたりの家にあつたと言われていた。現在では、二軒にある事は確認しています

一 句鑑賞

嫁ぐ娘の籍抜きに行く鯛雲 森 正勝

作者は、俳誌『こよろぎ』の編集に欠かせぬ重鎮である。立派に成長した娘を嫁がせる親の心は如何ばかりかと推察する。生まれた時から今まで、喜びや悲しみを共に過ごしてきた幾歳月が思い出され、頭の中を駆けめぐるのであろう。

折しも空には白い漣のような鯛雲が浮かび、親心はいっそう揺れるのである。さわやかなドラマ風な句がなんともいい雰囲気である。

(劍持芳枝)

が、その他の家が所有しているか否かは定かでない。

先般も長谷川某宅にも達磨画があつたが、燃やしてしまつたとのことで残念である。既に、四百年前の画であり、余程に保存が、しっかりしていなければ無理な面があるようだ。

紙質に加え、昔ながらの家では、達磨画等は縁起物として各家の土間にも貼りつけてあつたともいわれていた。それ程に傷みも大きくなつた事は想像でき

る。今度も野地某宅にある達磨画を鑑賞させて頂いた。真に見事な画である。惜しい事に三分の二程が傷み、復元には相当な時間・費用を要すると判断される。もう少し保存がよければと残念である。

故老の口伝によると、「風外さんは、食べ物がなくになると岩窟の外に、何か目印になる布? ……達磨画を掲げた。これを見た村人は、米を持つて達磨画と交換しようだ」と。

地元の郷土史家杉崎正五氏から聞いた話では「風外さんは、実に記憶がよく、年の暮れ・春の節句頃になると上の車(野地孝雄氏の家)に訪れた。餅つきの日を知っていたとの話が伝わっていた。大変ボタ餅が好物のようだった」といわれる。

訃報

松陰 良子さん

(まつかげよしこ)蓮乗寺小田原市小台一七二) 去る四月十八日逝去されました。

享年六十八歳

辻 亀雄氏

(つじきゆう)呑海寺住職、小田原市東町三一(二一三八)

去る八月十一日逝去されました。

享年八十三歳

柏木 温氏

(かしわぎぬたか)小田原市曾我岸八四) 去る八月十二日逝去されました。

享年八十六歳

また、杉崎氏は「風外聖人の記録には、五升達磨と言うた ……風外さんが書かれた達磨画と米五升と交換した」と、『田島史談』第四号に記されている。

かつては、田島には書・画が沢山あつたと云われたが、明治末頃から大正にかけて多くの収集家がい集めたと伝えられて

いる。そのため、今では田島には四点しか残っていないのでは？

現在、風外窪の横穴の中には、炬だけが残っている。さらに故老の口伝によると横穴の中に小石が相当数ある。これは村人が病になると、この小石を持ち帰り家の中に置きますと病気が治るとの言い伝えがあり、病が治りますと小石を倍にして、お返しをしたと伝えられていた。この事柄と風外禪師との関わりについては明かでない。

て十代も前の人からの代々の言い伝えとなり内容が不明確になつた事は仕方ない。

三 相模国小田原の成願寺と田島と上曾我までの風外禪師
1 何時頃どのような経路で成願寺に入山したか？

風外慧薫禪師は上野国(群馬) 碓氷郡土塩村に生まれていゝるが何故、相模国の成願寺に入つたのか、又、その動機は何なのかを当たつて見ると成願寺の法脈を辿つてみる必要がある。相模国足柄下郡成田村の成願寺の開山は梁屋慧棟禪師であり、その法系は相模の大雄山・最乗寺開山了庵慧明禪師につな

がつている。そして、風外禪師が若き頃(二十歳代)に、修業したとされる最大山・雙林寺(群馬県白郷井村)は曹洞宗の中心的な寺であり、末寺も多く、かつては著名な寺院であつた。その第十二世は、訣山銀鎮禪師である。この住職は了庵慧明系である。となれば風外禪師は、曹洞宗の雙林寺・最乗寺との繋がりがから成願寺に入つたものと判断される訳である。(高瀬慎吾氏)

時は無住の寺であり、住職を求めていたと記してある。要するに、風外禪師が積極的に入山したとも思えない節もある。あの寺が無住なので、寺の檀家の人達が誰か良い住職を望んでいたもので、最乗寺の僧侶あたりから、風外禪師に如何なものかと勧められ成願寺に入つたものと思われ。

入山した時期は、高瀬慎吾氏によると元和元年(五年頃(一六五二)と記してある。又、風外禪師研究家・松本敬氏は元和四年(二二六)前後とし、風外禪師五十一歳の頃と推測してある。いずれにしても、元和年間初期であつた。(つづく)

「開成カルタ」の紹介

佐久間俊治



小田原市の北隣りの開成町に、昨年十二月、「手づくりかいせいかる」と呼ばれる「がいにかる」が誕生した。同町婦人会(会長辻千恵子氏)が、昨年九月「歴史的な『新世紀』を迎えるにあたり、住民のみな

さんが、遊びをとおして、わが町の自然、歴史、文化、祭り等あらゆるものを思い起こし再認識しては「読み句募集のチラシか」と呼びかけて始まつた。実行委員会をつくり、町に聞かすいろいろな項目を50えらんで読み句を、婦人会を中心に全町から募集した。約百人の人から160句が寄せられたが、委員会

で重複の調整や一部補作をして四十五句にしほつた。
▲絵札の作成▼
読み句が決まつたところで「心あたりに頼む」方法で絵札の作成者をさがしたが、結果的には、文命中学美術部の生徒さんや、絵の好きな人、もと美術の先生など約30人の人々が描いてくれた。
▲内容▼
① 往還のひづめの跡ぞ牛島路」という歴史を読んでいるものから、② 六月は町民あげてのあじさい祭り」のようにい

まの町の大イベントまで、地域的にも時代的にもバランスがとれているし、また、「十王尊」、「銭太鼓」、「馬頭観音」あるいは「水神碑」など郷土史勉強の糸口になりそうな句もある。
▲反響など▼
出来上がるや、町内の集いやグループ旅行でゲームに利用されたり、またその最中に昔話に花が咲いたり大変好評である。マスコミ各紙にも取り上げられたせいも、今年のおじさい祭りを中心に予定通り売れており、増刷の話もあるという。

補遺 尾崎亮司 四 小伊勢屋の身代を揺るがせた 小田原競馬場建設 ③

岡部 忠夫

- ・「小田原保勝会略記」碑に関連して
- ・小伊勢屋の身代を揺るがせた小田原競馬場建設 ①、② (以上第一八四、八六号)
- ・小伊勢屋の身代を揺るがせた小田原競馬場建設 ③ (以上本号)
- (次号以下に掲載予定)
- ・小伊勢屋の身代を揺るがせた小田原競馬場建設 ④
- ・お濠埋立反対運動
- ・北村透谷碑について
- ・むすび

小田原町、足柄村がそれぞれ神奈川県知事に陳情

国府津町で競馬場獲得に猛烈な運動をしているのを見て、小田原町では事態を重くみて大正十三年(一九二四)十一月、町内三十一区の区長連名の陳情書を県知事宛に提出、同年十二月には、足柄村(現・小田原市)村会議員連名で同様の陳情書を県知事宛に提出した。

予定地は、中央が平坦で周囲はなだらかな勾配であり、酒匂・国府津方面を俯瞰できる風光明媚な地である。小田原駅から数町のところにある予定地は絶好の場所です。すでに道路は開削している。中央の空地はグラウンドとして四季使用する予定である。また、箱根・湯河原への観光客が来遊する場所として適している。関東大地震で小田原、片浦、箱根、湯河原方面は激甚な被害を受けており、その復興には小田原に競馬場を設置はかくなことが出来ない。当然、小

田原が適当な地であると主張した。

畜産組合臨時総代会

大正十三年十一月二十五日、畜産組合臨時総代会が開かれ、議事録署名人名には、田廣勝三と鈴木藤吉の兩名が指名された。

議案は、競馬場の経営を組合の直営とするか、第三者に委託するかに及んだ。開会前に別室で組合長、副組合長、田廣ら主だった代

議員等数名で提案を協議した。組合に資金がないことで第三者に委託経営することが決定。次いで「競馬場の位置その他は評議員の諮問を経て決定云々」の記録があり、議事録に田廣は署名しなかった。「諮問を経て決定」の内容で、競馬場をうまく国府津に持って行かれるのを恐れていた。田廣は、二十八日に尾崎亮司ら三人と共に下郡役所内の畜産組合に赴き、議事録を確認している。

田廣は真鶴出身で、十年間欧米に遊び、小田原町会議員となるや、すぐ町議三傑の一人に数えられたという。前号で記したが、傍ら小田原町新玉二丁目二四五番地付近(現・浜町二丁目五番)で三光社牛乳舗を経営していた。実際の業務は家族が携わっていたようである。

鈴木は、国府津町一五八〇番地(現・小田原市国府津二一三三五)に於いて「寿々勇」という銘柄の酒を発売していた三代続く醸造家であるのに、畜産組合代議員をつ

小田原競馬場開削前の風景 (尾崎正氏所蔵)

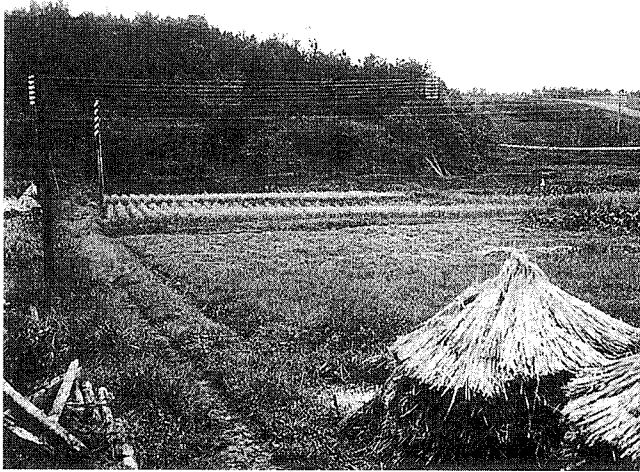


大正13年(1924)10月撮影

とめるのはおかしい。しかし、国府津の大正十一年(一九二二)の家畜・家禽の飼育数は、牛十三頭、馬五頭、豚二十一頭、鶏七七〇羽で、鈴木が、間接的に家畜の飼育に係わったかどうか不明であるが、彼が農業購買・販売組合委員、農業会会長、水産業組合代議員などを勤めていて、畜産組合代議員を引受けていることに不自然さはない。

県が仲裁に乗り出す不調

遂に競馬場位置争いに、県では調停に乗り出し、十二月二日吉武畜産技師を小田原に派遣した。小田原は足柄村との有志連合会を開いて協議し、即答を保留した。引き続いて吉武技師は、国府津側に赴き有志と会見し、内容を示し妥協を説いたが、国府津側は、花柳界が一日一円、その他は一銭



小田原競馬場開削前の風景 (尾崎正氏所蔵)

の日掛けを積立て競馬場開設の一部と誘致運動費に充てることとして意気盛んで、互いに譲らなかつた。

花柳界が一日一円、その他は一銭の日掛けは西山徳太郎の才覚であつたと思われ。西山家は、梅沢(現二宮町)の地で元禄時代以来、代々旅籠を営んできた。父祖伝来の地を離れ、国府津に移り駅前旅館「蔦や」を開業することを決断したのは先代徳太郎が四十一歳の明治二十一年(一八八八)の時である。その前年の七月東海道線が横浜から国府津まで開通し新橋まで繋がり、将来の発展が約束されていたのである。そのうちに徳太郎は三業組合長に推挙された。宿は南に相模湾を望み清々した気分で寛げる雰囲気があるところから、京浜地区から多くの人が来泊するようになった。のち

に閑院宮が泊まったこともある。

徳太郎は、もと前川の素封家の長男で北村仙二郎といい、先代に見込まれ明治三十二年(一八九五)婿養子として先代の次女ノブと結婚、大正二年(一九一三)徳太郎を襲名、家督相続している。

西山は、大正六年(一九一七)四月以来、昭和八年(一九三三)三月までの十四年間、国府津の村会・町会議員(大正十四年四月町制施行)を歴任、一年、間を置いて昭和九年(一九三四)三月、助役にひっぱりだされ、同十一年十一月までを勤めると、次いで同十五年一月までの四年間町長を勤めることになった。町長就任は、町(村)会議員・助役時代の力量手腕を評価されたものであろう。

ところで、西山徳太郎も尾崎亮司も旅館店主であることは共通している。旅館の経営の実際は細君の女将に負うところが多い。それだけに店主には時間的な余裕がある。その余暇を、それぞれが町の発展に尽くした訳である。そこには競馬場を巡って一時は激突があるわけだ。小田原と国府津と協定が結ばれてからは、後で記すように西山は、三業組合を代表して小田原競馬倶楽部に加わっているし、競馬倶楽部解散時の役員になっている。

大正十三年十二月十日、県は吉武技師を再び小田原に出張させて再度調停させたが、小田原側は拒絶した。小田原では既日前日、競馬場設置委員会を町役場で開き、尾崎亮司をはじめ町内三十の区長の了解を得て競馬場を小田原に設置してもらいたいと神奈川県知事に請願書をだしたばかりである。県が仲裁に乗り出しても、拗れた話

は、すぐさま纏まるものではなかつた。

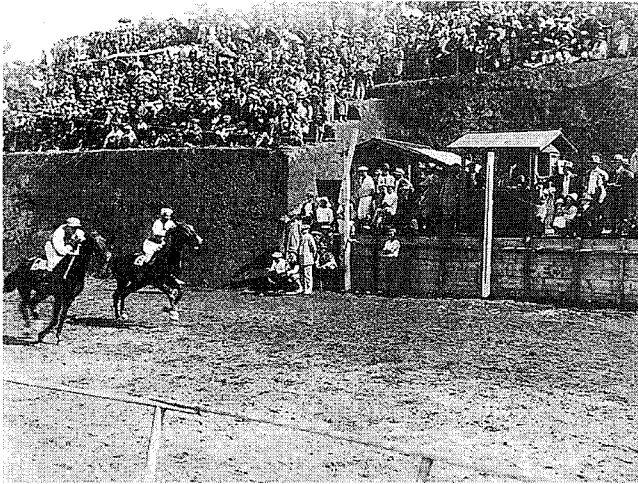
吉野勝足柄下郡長は、この年の十二月十一日、郡長を勇退している。同時に畜産組合長を離任した。昨年二月着任してから一年十カ月ほどで、組合創立からは二カ月足らずである。その間、関東大震災に遭って復興促進に苦しみ銀行合併で辛酸をなめ、その上、激烈を極めた競馬場位置争いに調停ままならず、辞任を決意したのであろうか……。

翌大正十四年(一九二五)に入ると、一月七日に畜産組合評議委員会が開かれた。議題は畜産組合長推薦と競馬場の決定の二案件であった。議長の長谷川良輔副組合長は、組合長の人選は慎重に選考すべきであると決定を保留とした。議題が競馬場開催場所の選定に移ると、第一回の開催地は国府津と決定された。小田原側は、国府津と交渉中であり、まず新組合長は、当然新任の伊藤龍雄郡長を挙げるべきである、それを無視して遮二無二競馬場の選定に走った、その態度は県を無視した不埒の行為である、と非難しても始まらなかつた。長谷川良輔は、その後、下郡畜産組合長に就任している。国府津も町の将来がかかっていた。

小田原、国府津双方で花競馬

大正十四年一月二十五、六日、国府津畜産株式会社による馬場工事が完成すると、国府津は、花競馬を開催した。花競馬は、馬券が発行されず入賞馬に旗が贈られるだけであった。

競いあうかのように、小田原では小田原・足柄以西の荷車組合が、二月三、四日の両



花競馬か？小田原競馬場（尾崎正氏所蔵）

日、観梅を利用して、小田原競馬倶楽部が第一期工事が終わる谷津の競馬場を借りて花競馬を開くこととした。国府津と競争の立場にあるため、小田原ではその前日、自動車五台利用して数多くの旗をたて宣伝にこれ努めた。その甲斐あってか、初日の入出は予想以上で正午既に競馬場の周囲は黒山となり、その数五万人を越えた。また、二日目は、大磯、国府津、松田、山北方面からの見物客で小田原駅に着く列車は満員で、湯河原方面からの上り列車も同様であり、箱根方面からは電車と自動車で、駅に着くたびに馬場まで踵を接する程の、前日以上の入出であった、と新聞は伝えている。

物見高いは人の常、どのような設備を持ったかと、まだ二、三期の工事も終わらない中に物珍しさが手伝い見物人が押し寄

せたのであろう。それにしても、入出が五万人を越えるとはオーバーの感じがする。

小田原、国府津双方の手打式

同年四月十八日、小田原競馬倶楽部と国府津畜産株式会社の共催による「荒久海岸の藤館（小田原市南町三十三）にて粗酒一盞呈上」の案内が関係者に送られた。手打式である。

第一回目の公認競馬会は国府津と決まり、足柄下郡畜産組合は、五月十一、十二日と十四、十五日の四日間の開催で、入場料三十銭、馬券付入場券一円を発行と決め、県に認可申請をした。競馬収入は予定以上の九万円に達した。

第二回は小田原で実施されることになり、四日間で二十万円の収入を見越したが、既に農繁期にはいるので十月に実施を申請し、十月二日に開催された。県外十二県の優勝馬が出場する予定で、知事からは優勝カップが贈られる賞典競馬で大いに期待が持たれた。入場者は三千余名であったと伝える。ここで気になるのは、花競馬の五月四日の最終日には五万人の入出を数えたという新聞記事である。当時の新聞は往々にして大雑把な場合があった。きっぱりした記事を提供するようにしたのは戦後になってからである。

ともかく、小田原と国府津で交互に競馬会の開催を一本化出来ないかという望みは、突き詰めれば、最終的には何としても競馬場を小田原に持つてくることだった。

漸く競馬会を小田原へ一本化

依然として小田原と国府津とは睨み合い

の状況にあり、畜産組合長の下郡長伊藤龍雄は両町の町長や有力者を招致し幹旋に乗り出していた。

小田原と国府津と競馬場を一本化するため、畜産組合評議委員会が大正十五年（昭和元年）二五三月三十日、足柄下郡役所で開かれた。小田原、国府津双方互いに譲らず、すぐには話は纏まらなかつた。補償額をどの線で纏まるか妥結に至るまで虚々実々の動きがあつたに違いない。伊藤下郡長、狩野警察署長、今井小田原町長が幹旋した結果、無条件で調停者に委任することになり、審議の末小田原側より三万九千円を国府津に支払うことに漸く決まり、三十一日午前二時散会した。

小田原競馬倶楽部の役員改選

小田原競馬倶楽部は、小田原と国府津との妥協が成り立つ三カ月前の大正十四年二五五も押し詰まった十二月十五日、総会を開き、畜産組合の幹旋による国府津側との合併問題についての経過報告が行われた。その内容は、小田原の馬場を使用する競馬場を一本化のために新たに競馬倶楽部に組織替えして、国府津の競馬場は屠殺場とする内容であった。そのためには、競馬倶楽部は国府津側にながしかの補償金を支出する腹は決まっていたと思われる。続いて役員改選が行われた。

新役員はつぎのように決まった。

理事 伊勢田廣吉、尾崎亮司、難波健、

松尾朝二、松本越、勝俣真吾、金

野房雄、開沢好治郎、遠藤太郎

監事 中川佐十、八亀光吉、中山市蔵

会長には伊勢田廣吉が就任した。（つづく）

私の青春 ⑦

菅沼 博

結構進んでいた機械があったが、生産が遅かったのかもしれない。

今でこそ内燃機関のエンジンにターボという言葉が出てくるが、当時は通常的に使われていた。また日本の飛行機にはターボが当時付いていないと思ってる人がいるかもしれないが、ターボはちゃんと付いていた。ただ排気ターボではなく、機械的作動ターボであったため、性能的に良いものが出来なかったのだと私は思っている。

機械的作動ターボの場合は、自分のエンジンの力でタービンを回して、空気を圧縮しエンジンに圧入する。一方の排気ターボの場合は、エンジンから排出される排気によりタービンを回して空気を圧縮している。

片方は自分の力で、もう一方用済みの排気の利用する、という事では勝負は解りきったものである。

高空の空気の薄い所で、ただでさえ息が切れるのに、自分の力で高圧空気を取り入れるの

と、他力本願で取り入れるのと差である。

終戦間近の頃の先輩達は、B29の敵機襲来で飛び上がり帰ってくる。

「九千〜一万米ゆくとアップ、アップであと一息の所で高度が取れないんだよな」と嘆いていたのを思い出す。

日本では排気熱に堪えられない金属が出来なかったのが原因だったのではなからうか。

我々はこのターボを過給器と呼び、英語ではスーパージャーチャーと呼んでいた。

食事が終わり十三時には完全軍装で舍前整列という時などは、食事後の短い時間が戦争のようにいそがしかった。

背嚢を背負う場合は、背嚢の周囲に夏は天幕、または雨外被、冬は外套を着装しなければならぬ。

常時、背嚢の周囲に外套を付けて置いてある訳ではない。

訓練の状況、季節により、付けるものが変わったのである。背嚢の周囲に長さをピタリと合

わせて、外被等を巻き付けるには相当の熟練を要した。

鉄帽、水筒、雑嚢、帯剣、小銃を身に付け、巻きやはんを巻き終え十三時キツカリには舍前に整列完了していなければならぬ。

整列完了だけで済むのであるならば、たいして苦にはならない。とくかく急げばよいんだから。

軍装検査が大変なのである。小銃の銃腔検査・帯剣、軍靴の手入れ状況・襟布の清潔度・携帯品の状況等々、ひどい時には禪の清潔度まで検査される。

寸暇を惜しんで、普段あらゆる事に気配りをしておかないと、鉄拳かびんたが飛んできた。

特に、びんたの中でも痛いのは上靴びんたであった。上靴は皮製で、これでびんたされると、類の皮がやぶれ、口の中まで切れてしまう程であった。

舍前で隊伍を組むと、「前へ進め」の号令の下に、行軍を午後一杯やらされたりもした。

或るときは、背嚢の中の靴下の中に米を持たされ、塩鮭を雑嚢に入れ、行軍の目的地で飯合炊飯をやらされたが、たしか河原であったので多摩川べりだったのかもしれない。

飛行兵学校卒業が近い頃になると、各個訓練の中でも完全軍

装で突撃訓練程苦しいものはなかった。

私は走る事を苦手としていたため、何時も突撃は遅れがちであり、後からついてくる班長にこずき回されていた。

これに反して体育訓練の場合は体操服に身を包み、区隊長の教官の下、あらゆる機械体操をやった。

特に、梁木の上の片足水平は高さが高いので、落ちたら本當に怪我は免れない高さであったが、この上から落ちたという事を見たり、聞いたりしたことはなかった。

皆選抜された運動神経抜群の少年達であった。

私は小学校の六年生の時には、蹴上がり、大振り、巴等の鉄棒の運動は他人よりも数段と巧く、小学校の同級生にはうらやましがられた。

しかし、ここでは私の技術は最下位の方で、同級生に見せるのが恥かしいような状態であった。

正車輪、逆車輪、大和魂、空中回転等を苦もなくやってしまう者ばかりであった。

体力的にも優れた者が多く、私はいつも疾走ではビリ駆け足ではビリという具合で、劣等感に何時もさいなまれていた。

白い体操服に着替えてやる体

育訓練は楽しい反面、寒い時は後の体操服の洗濯が大変であった。

寒い時の洗濯は石けんの泡が出ないので、奇麗になかなかならなかった。

また、この午後の体育の時間が剣道の時間になったりもした。私は中学時代は剣道を学んでいたが、この剣道経験は全然使い物にならなかった。

剣道着は無いので、体操服の上に剣道防具をつけ竹刀を持ち、外見は中学時代と全く同じであった。

しかし、中身たるや全く別で、実践的剣道であった。むしろ剣道ではなくて、剣術といった方が正解である。

「竹刀は真剣と思え、相手は敵と思え、一撃で相手を倒さないと次の敵が直ぐに襲いかかる」と剣道教官は言う。

剣道の試合は「始め」の教官の掛け声が始まるのは中学の時も、兵隊の時もおなじである。

状況の設定が違うのである。

両者の距離は十米以上離れ、そこから「始め」の号令が掛かる。

一撃で相手を倒せ、竹刀の舞は現実では在り得ない。即ち、今様の両者が睨み合い、やあ、やあと掛け声を掛け、竹刀を鳥の「せきれい」の様に動かし、相手に隙があれば打ち込む、こ

のような状況は殺し合いの場合生ずるわけがない。

敵は一人ではない。二人目、三人目の敵に横から長刀や槍を突き出されるのは必定である。

要するに、ここは戦場であるという原点を理解すればその試合の様相は自ずから解つて戴ける筈である。

結果は簡単である。体力に優れた物、素早い動作する者、気力充実している者が勝ちを制する。

したがって、剣道の時間の時は大変である。防具は在っても無きが如しで、生傷はあたりまえである。

私のような背の小さい者が相手と戦い勝ちを制するという事は無理というものである。

「やあー」と精いっぱい声を振り絞り、竹刀を振り上げ突進する。相手も同じように突進してくる。

皆、私より体格は良い、しかも身のこなしは素早い。一瞬の差で相手の竹刀は私の頭を直撃する。凄い力だ。

私は倒れる。その上にまたも、岩石を砕くのではないかと思われる竹刀が振り降ろされる。

要するに、竹刀を持った殺し合いと思えば正解である。

「止め」の教官の号令が掛かるまで続く。

私のような背の小さい、非力の者が相手と戦い勝ちを制するには、と考えたとき、たとえ勝てなくとも敵に一刻を報いようと考えたのは「突き」の一手である。

相手は竹刀を両手で振り被り、真一文字に突進してくる。

私は正眼に竹刀を構え突進する。相手の竹刀は猛烈な勢いで私の頭上に振りおろされる。私は委細構わずただ一途に相手の喉、胸の辺りを狙い、腰に力を入れ力一杯竹刀を突き出す。

この場合、頭上に受ける打撃の方が一瞬早く私は負けになる。

しかし、試合の結果は負けになつても、私の竹刀は再三折れるという事が幾度となくあった。

剣道の防具の喉下あたりは突きを真ともうけると、防具の下に竹刀の先は潜り込む。この結果は相手に怪我を負わせるといふ事になるが、何時も頭上を強力に叩かれ、きなくさい臭いと、痛さに堪えている事を思えば、「ザマー見ろ」と溜飲を下げたものである。

確かに、刀で敵と相対した時、何もしなければ、直ぐに敵に打ち倒されるといふ状況であれば、死にもぐるいで敵に向かって行く事は理解出来るもの

であった。

教官は言ったものである。

「剣を持ったら、食うか食われるかだ、敵に先手をとられるな、先に敵に致命傷をあたえよ」

正に戦国時代の再来であった。

当時の私は若く、張り切りボーイであったので身体がもつたのかもしれない。

午後の課業は五時に終わる。食事は五時から六時までの間に済ませなければならぬ。食事当番が課業終了と同時に食堂にでかけるのは、朝食、昼食と同様である。

残余の者は借りだした訓練装具の返納や手入れをし、終わるか終わらない内に、

「食事、舎後集合」の号令が掛かる。

整列して食堂に行き食事が終わって駆け足で内務班に帰つてくると、次は入浴の時間となる。

入浴は第一洗から第三洗まである。呼び方は「ダイイッセン」と言うように呼称する。

第一洗は五時三十分から六時までの間に入浴を済ませる。浴槽は四、五槽あったように記憶しているが、日により浴槽番号が示された。

したがって、第三洗という事になれば、六時三十分から七時という事になる。(つづく)

露国・日露の役俘虜のこと(17)

八十七年ぶりのお礼 後編(5)

内田善作記
吉田雪子編 「日露戦役従軍記録書簡往来」

故・隠岐威重

八ハルピン病院を退院
モスコの病院へ

(一八二号) つづき

奥津重太郎氏より

内田善作殿

先日送りし金並びに手紙受け取りしや。只今は傷はどうであるか。歩くようになりしや。手紙出せる限り出して下さい。親類一同無事であるから安心せよ。講和談判場所もアメリカのワシントンに決まりました。そうです。今度は左の品物を送りましたから受け取るべし。鉛筆、手帳、紙、手拭、ハンカチーフ、包帯、解熱薬、検腸丸、襦袢、シャツ、足袋、股引、針、糸。他に入用の物あらば手紙出すべし。冬物はこのつぎに送るつもりです。

六月十九日

(電報仮名文)

内田重兵衛より、ハルピン赤十字病院 内田善作殿

三月二十六日の手紙本日着、御前事両足・肩負傷の由。厚き治療を受け快方におもむきたる由、家内一同安心した。今は傷如何、返事待つ、宅は皆無事安心せよ。身体大切に養生せよ。

昨日小包二個、金子十円送った、着の上は返事くれ。

六月三十日

(電報仮名文)

奥津莊郎氏(国府津)より

内田善作殿

其本儀、去三月九日の戦闘に、両足並びに肩負傷し赤十字病院に収容せられし由、承知つかまつり候。私方、皆無事安心せられよ。陽気の変わりもあり自愛せよ。暇あらばロシアの言葉習へ、見物もなさい。酒井次三郎様に宜しく願います。

六月三十日

(電報仮名文)

中山利八(多古)店員一同より
後備歩兵一等卒内田善作殿
拜啓 三月奉天付近の戦闘に

おいて、両足及び肩を御負傷され、ハルピン赤十字病院に収容され、厚き治療を受けなされ候由。店員一同同情の至りに耐えず候。只今にては如何候や。尚御身体御大切になされ度候。

六月三十日 大日本小田原在多古 中山利八・店員一同
(電報仮名文)

中山うめ(多古)より

後備歩兵一等卒内田善作様

御負傷なされ、ハルピン病院においで由、実に同情にたえません。当節にては傷は如何ですか。四月七日の御手紙一昨日狩野に着き三月二十六日の御手紙、小田原に本日着きました。小田原、狩野皆様御無事です。宅の子供も学校優等にて試験も上り大丈夫です。御安心ください。御体を御大切に。かしこ

六月三十日

(電報文)

中山光太郎(多古)より

後備歩兵一等卒内田善作殿

叔父さん傷は如何ですか。御体御大切に。
(電報文)

内田はま より

ハルピン内田善作様

久々にて、御手紙頂き実に夢かとばかり思うのみ也。肩と両足を御負傷なされし由、その傷は何の傷ですか、伺い度候。と

ても命は無きものと思ひおり候処、幸いにも救けられて、厚き治療を受けておらる由、陰ながら喜びおり候。何にても御身御大切になされ度願上候。宅にては、祖父始め無事故御安心なされ度候。御入用の物は何に限らず御手紙ください。酒井様に宜しく願ひあげ候。貴男よりの手紙は六月二十九日に着きました。

七月一日

(善作氏の奥さんから電報文)

日本国神奈川県足柄下郡

小田原町新玉二丁目蓮上院

高木快雅氏より

ハルピン赤十字病院

内田善作様

その後は久しく御無沙汰致候。貴男には御怪我なされし処も、今は治りて御無事の由、喜ばしく存候。時々御宅に訪れ手紙を拝見いたし、御地の模様も承り安心致し候。然し一時、手紙の絶えて来たらざる時は、お宅は勿論、他一同にも非常に心配致し候。今は飲食物等も、手厚く給与ある由、誠に開けたる御代の賜に候。お宅には皆様お変わりもなく候故御安心有るべく。私は朝夕貴男の身上の御無事なることを仏人に祈りおり候。度々御手紙差出し度も、これまででは手続きも分からず、唯

遙かに思いやるのみにて、打ち過ぎ候。早く戦いがすみて御帰りになる時をひとへに喜み待ち候。
(電報文)

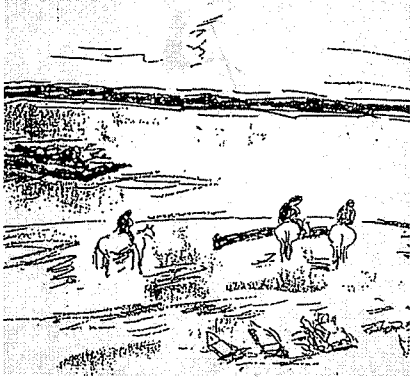
内田新太郎 (中宿) より

内田善作様

もし、善作さん、良ろしう御座いましたね。私はどうなされたか、実に心配したよ。三月二十六日の手紙が数日前に着いたので、実に安心致しましたんです。然、傷も大分良いようです。事ですが、充分体を大切にさないよ。あまりながくなりても悪いですから、このくらいでやめます。さようなら
七月四日

本山高親氏 (小田原町十字四丁目) より内田善作様

時下益々御清康賀奉候。本年は日本の内地一般に雨量多く、



盛夏の時に当りて猶暑さを知らず。殆ど春気より一躍秋冷に相成り、始末大いに困難仕り候。さて戦争も愈々終結に相成り、講和談判は不面目の条件には候へ共決定いたし候。実に戦勝国の対面を汚す如き条件に候へ共、世界人類、幸福のため残念ながら、平和を取り結び候。就いては貴男にも近々御帰国の事と存じ候間、取敢えず談判模様御報知まで。
八月二日
早々

本山高親氏より

内田善作君

拜啓 陳者 打ち絶え御無沙汰仕り恐縮の至り、御寛容下され度候。その後負傷の経過如何に候や、兎に角、東西気候の相違も之有り候で、随分御大切に相成り度。当地は貴宅始め未ながら野生も無事、此の段御休心下され度。

猶、前回申述べ候通り貴君に於いては既に兵士としての本分は竭され候事故爾後益々身体御大切に相成り、他日、帰国の節、日本国民の義務として国益を計る事、尤も肝要に御座候。就いては、その地に滞在中、及ぶ限り露語の研究を具せざる可らず。露国人の嗜好する物品、君の目下の商品は申すに及ばず、茶、煙草、食物、菓子、衣類、

(品位、地合い、色彩) 或いは器物、小児の玩具に至るまで、事細大となく御注意之有り度。

一朝時を得れば巨万の富を得、国益を計る事、国民に義務たるを忘るなからん事を希望す。今や講和談判を米国に於いて開き露はウイッテを以て全権委員としローゼン等皆米国に集まる。日本の小村外相全権、高平公使、着々歩を進む。この時にあたり我が陸兵は北樺太の占領あり。カムチャツカ海峡よりオホーツク海を封鎖し、黒竜江沿岸を討破し韓地や満豆江を押し正に浦潮を攻略せんとし、満州方面今や風雲に乗じて敵軍を塵殺せんとす。敵は奉天大敗戦以来クロバト貶せられて第二軍団の司令となり、リネウイッチ総司令官となる。リネの手腕、豹狼の如く軍略のクロバトに劣る。次に大激戦あらばリネ宛にすべし。ハト遁るべし。是勝敗の決する処。露軍半ば必ず死傷せんか。今少し永く相成候。

平和も遠からず来る事と存じ候。願わくば益々自愛せられん事を希望す。
明治三十八年八月二十四日

高等小田原小学校 齊藤兼吉氏より内田善作様

未だ拝顔を得ず候へ共時下炎暑凌ぎ難く候。御家益々御清栄

に候段、大賀奉候。本日御家庭に就て拝参するに貴下には今回の戦役に於いて非常なる御働きの処、不幸にも御負傷に相成り候結果として、敵地に無念の月日を御送りの由、嘸御残懐の御事と遙察奉り候。文明の今日とはいえ人情凡俗より衣食住、その他言語等すべて隔地の事として御不便不愉快御座あらせらるべく、御気の毒の感にたえず候。

その後御身体の御模様等如何に候や、伺い度候。かつ又御序でも之有り候はば目下その地にあらるる我が軍人軍属等何人位候や。

朝夕御慰めとしては如何なる品物が最も適当に候や。及ばずながら御申し越しにまかせ差し上げ候。御返事願ひ度く、加えて学校生徒の為何か有益のお話も之有り候はば折りを見て御通信下され度願ひ上げ候。先近況御伺いまで此の如くに御座候。
八月十八日
不備

淡海米太郎氏 (十字二丁目) より内田善作殿

拜啓 陳者 目下本邦の氣候、梅雨未だ納まらず而し、日を追つて暑気相増し候。爾来打ち絶え御不音仕り万罪鳴謝し奉り候。さて貴君事出征以来の御音信は貴宅にて悉皆承り、毎々御参加の戦争にも別段の御負傷

もなく陰ながら喜び居り候。過日の奉天大会戦の節戦地に於いて御負傷までは、事実目撃したる貴君戦友(但し貴君と共に負傷、内地へ後送せられたる兵士)より承り候へ共、その後遙として御所在不明に相成り、貴宅にても種々探訪に手を尽くされ候も、或いは病院に之有る如く、或いは戦死に相成り候如く少しも分からず、先ず行方不明と申す事に定まり心痛致し居り候処、今回計らずも御負傷中露国軍隊に収容せられし事判明致し喜び上げ候。

実に貴君の如き旅順包囲以來、激戦亦激戦遂に大負傷相成り、全く戦鬪力失墜の上、敵に収容せられしなれば、名譽の捕虜として愧ずべき事之無く、宜しく兵士の本分を尽くされ候事と感服仕り候。この上は一日も早く御全快、他日御帰国の上、平和の戦争、即ち商業上、富国の基礎を建てられ候事、国民の義務と存じ候。願わくば身体御大切に御加養の程、希望し奉り候。猶、時候風土の異、御注意の程願ひ上げ候。些少なから当地名物ウイロウ差し上げ候間御笑留下され度。

七月四日

内田善作より(露国メジムエー
ジにて) 内田ハマ殿

拜啓 久しく御不音に打ち過ぎ候処、御家内様並びに親戚ご一同様にも御機嫌よく御起居遊ばされ候由、去る八月出の御書面にて拝見致し私も嬉しく存じ居り候。次に迂生も相変わららず消光罷在り候間、御放念下され度願ひ上げ候。荷物は正に着手仕り候に付、美の屋様、片野様、中店、宮の前へも宜しく御伝言下され度、金具の義は未だ不着に付、御承知下され度、何れ近々その中に着いたす可くと存じ居り候。東京堀江町よりも魚類の缶詰め並びに金子トメ円(商売上の符丁)御送付下され候に付当家へも宜しく御伝言願ひ度、何れ五、六日中には当地を出発候可くに付、無異帰朝の上は万々申し上げ可く候。末筆ながらおきぬ様にはお手紙下され誠に嬉しく拝見致し候。何分宜しく申し伝へ下され度候。

十一月十八日出

内田善作より

奥津重太郎様(狩野)

拜啓 その後は御不音候処、御家内様益々御機嫌よく御起居遊ばされ候由、御手紙にて拝見致し候。就いては私事も相変わらざ消光罷在り候間、御休心下され度候。

劫説 先般御送付下され候、荷物は正に入手仕り候。御手紙

にて拝見仕り候へば八月二十三日出にて荷物御送付の由、未だ不着に候へ共、その中には着いたす可くと存じ居候。五、六日の中には当地を出発の予定につき、何れ帰朝の上は万々申し上げべく候。父上、母上様にも姉上様にも宜しくご伝言相成り度願ひ上げ候。

惟喬親王伝説異伝

蓮沼州子

十一月十八日 露国メジムエージにて
十一月十四日、日本ドイツ駐在公使館付陸軍歩兵鷹司少佐殿、当メジムエージに日本捕虜を訪問せられたり。外に文官二名同道せられたり。
(つづく)

惟喬親王は紛れもない実在の皇子であり、本来なら天皇となるべきであったが、それがかなわず、大和吉野川上郷、近江小椋郷、洛北小野郷といった皇居の外で隠遁してのご生涯であられたので、ご幽棲の地、ご逝去の御蔵、墳墓の地などさまざまな説があり、この他の地にも惟喬親王伝説がある。

がある。これは早川の氏神様で紀伊神社といい、特に箱根物産木工業の人々に昔から木の神様として崇拜されてきた。祭神は天照大神の御弟の御子で木祖神といわれる五十猛命と木地師の祖神惟喬親王である。

神奈川県小田原市の西いわゆる西相模から伊豆半島の東海岸一帯に貴宮、紀宮、来宮などとそれぞれに字も由来も異なるが、きの宮と呼ばれる神社が十七カ所もある。

『神奈川県皇国地誌残稿』の中に相模国(現神奈川県)足柄下郡早川村の項があつて、紀伊神社については、五十猛命を奉った木宮大権現が紀伊宮大権現となり、明治維新の後に紀伊神社に改められたと記され、『木宮大権現由来記』と題する文章が掲載されている。この中に惟喬親王についての記述がある。

神奈川県小田原市早川に、この中の一つで土地の人から「木の宮さん」と呼ばれている神社

当社木宮大権現は文徳天皇の

第一皇子惟高親王を奉つてある。

その由来は、天皇には皇子、皇女が多数生まれたが第一皇子惟高親王は、母が更位であつたので皇太子になれず、皇后を母とする末弟惟仁親王が皇太子に立てられた。惟高親王はこれを不満とし、謀反を企てたが失敗して、流罪となつて伊豆に赴いた。

貞観二年六月の末、惟高親王の妃が、若君姫君および女官とともに、従臣小倉兼久、加藤光俊、光吉兄弟らを召しつけて親王の後を追ひ、都を出て伊豆に向かわれ、河津の郷あたりで惟高親王の消息をお尋ねになるが、なかなかわからない。そこで山を越えて相模国(神奈川県)に行く道中、七歳の若宮がお亡くなりになつてしまつた。やがてここに若宮が奉られ、岩ヶ崎の児大権現となる。

さて、惟高親王は伊豆に行く途中の海上で嵐に遭われ、相模国唐土ノ浦にお着きになり、陸路より伊豆に向かわれるが、その途中でご逝去になられてしまふ。貞観一五年のことである。

妃一行はこの地にたどり着き、親王のご逝去を聞かされて、この地にとどまり、女官

および従臣は親王のご在世のときと同じように仕え、木地を挽いてご遺族を扶養し奉つた。これが関東における木地挽きの始めである。

従臣小倉兼久と加藤光俊はこの地にとどまり、加藤光吉は都に帰り、清和天皇にご報告申しあげたところ、清和天皇は勅使を遣わして、惟高親王の霊を木宮大権現として勧請なさり、親王ご逝去のこの地早川を寄進遊ばされた。これ以来従臣小倉氏、加藤氏が早川を支配し、早川党の初祖となる……

というのが大体のあらすじで、紀伊神社の由来とともに、惟喬親王の従臣小倉氏、加藤氏が木地挽きをしたこと、早川が関東における木地師の発祥地であるということなどが記録されている。

紀伊神社の社宝木地挽は、小田原市の重要文化財に指定されている。

後に小倉氏、加藤氏は源頼朝の拳兵に際して戦功のあつた早川党の長となり、子孫は現在もこの地に健在である。

惟喬親王の若君がお亡くなりになつたといわれる岩(神奈川県足柄下郡真鶴町)には兒子神社があり、若宮と惟喬親王が奉られ

ているという。

古代の豪族紀氏一族は木工にも関わる一族であつたこと、惟喬親王の母方は紀氏であつたこと、木祖神といわれる五十猛命は紀国に移住して全国に植林をなされたことなど、「木」と「紀」の関わりは、興味深く、奥深く、難解である。

また、三重県員弁郡、度会郡にも惟喬親王伝説があり、親王ゆかりの神社その他の遺跡があるという。

これら惟喬親王が関わつたとされる地は、時代の移り変わりとともに、新しい制度のもとで、市や町あるいは村としてすでに地名の変わつている所もあるが、その遺跡は神社仏閣として、御陵として、御座像として、資料館として、あるいは草むらの中の一本の標柱として今も確かに残っている。

単に残っているというだけでなく、それぞれの地には必ず、惟喬親王に関わつたという人々の子孫がいて、千年以上を経た今日も、生々しく惟喬親王を追慕し、誇りとしているのである。そしてそこには、惟喬親王を祖神とする木地師の世界が背景にあつて、一般の人に広くは知られていないが、それだけに、現代風にいえば、「熱心なファン」

がいるのである。

伝説的なものが多いといわれているが、惟喬親王は実在の皇子であるから、事実に基づく遺跡も多いはずである。いずれにしても、それらは厳然として、歴史を物語っているのである。

惟喬親王のように、雲の上から一般人の所に下りてきた皇族が、親しみのもてる人となつて、千年以上、おそらく永久に、関わつた人々の子孫代々の心に生きつづけ、それぞれの地でその由来をかがげ遺跡として保存され、多くの人の目にとまるということは、事実、伝説などということを越えた重みがあり、偉大なことだと思ふ。

多くの人が惟喬親王を心のよりどころとして崇拜し支えられて生きたという、神秘的ではあるが確たる事実がある。

日本全国の木地師の祖神は、惟喬親王、なのである。

(おわり)

以上は、連沼州子著の「木師研究叢書第一冊」『惟喬親王と木師の物語』(日下部庄一氏提供)の引用で、転載するに当たつて著者の許可を受けている。

さかわ 酒匂史談 ⑦

かわせはやお
川瀬速雄

六 酒匂川

⑨川留

川留とは江戸時代、河川が増水し渡河が困難な期間、川越を禁じたことを指した。酒匂川では一尺八寸を平水、二合水(三尺三寸四尺)で馬越を中止、三合水(四尺五寸)で往来を中止にしたことや、往来を再開することや、往来を再開することを川明けと云ったことは前に記した(『小田原史談』No.184)。

ただし、御状箱越えの例外は認められていた。天明元年(二六二)七月、酒匂川が川留であったが、大坂御番頭組中のものが、緊急のため川を泳いで渡った。勿論、酒匂村名主は、このことを地方役所に届ける必要があった。

また、川留である藩から宿を要請されたが、宿が無いので断った例がある。一方、大名が川留やその他の差し支えがあ

り、名主の家に立ち寄ることがあるので、見苦しくないように玄關を付けるようにと、言い渡されたことがある。このとき地方役所より酒匂、網一色、両村の名主に発したのは、天保十五年(二六四)十二月十一日であるがその月の二日に年号が弘化元年に変わっているのをみれば、当時、情報の伝達が遅かったことを物語る。

余談ながら、川頭・伝助の子孫小嶋栄之助氏宅に大名が川を渡る時対岸との合図に使ったと云う、島津藩の旗が残っている。

川留で大名が滞在する時、藩主は名主宅、重役達は組頭宅、豪農宅を宿にするが、下級武士や足軽達は、近くの農家商家に分散滞在する。名主宅近くの農家で「菜っ葉や」と陰口されている家があった。川留で下級武士がこの家に宿泊することになった。大名と云うと

聞こえは良いが、その内状は火の車で、手当なぞ最低で、おまけに気位が高く何のかんのとうるさい事。この農家の親父、頭に来たのか、支給される手当で賄う食事として、菜っ葉主体の副食を三度三度出した。やがて川留が解け大名は出立。この農家に泊まった侍が出立する時に「一昨日もナ、昨日もナ、おおきにナ、ありがとナ」狂歌を詠んで、以後菜っ葉屋と称せと云い残したと。大名の渡河で村民がいかに負担を強いられ迷惑していたことか。

七 酒匂橋

徳川幕府が瓦解し幕府の制約もなくなり、架橋技術も進歩したので永久的な橋を架けようと、酒匂・網一色・山王原の三村民協議、三村の各民費を以て架橋の費用とすることにした。以下年次を追って酒匂橋架設の状況を列記する。

明治十四年(二六二)野村県令初め地元有志三村民協議し、長さ一九八間(三

百六十米)中二間(五、四五米)の木橋架設工事を始め、翌明治十五年(二六三)二月に完成し、通橋料一名八里を徴収した。著者の祖父(明治四年生、昭和十九年卒)の話によると、この橋は出水の時、

橋杭に「流木」や「ごみ」が引っかかり堰のようになり、しばしば通行止になった、橋番が絶えず見廻り、通橋の可否を決めていたと、そして毎年修理補強がなされていたと云う。

明治十九年(二六六)国府津く小田原間の鉄道馬車敷設を念頭に、強固な橋に架け替えられた。鉄道馬車は明治二十一年(二六八)十月、開業された。

明治二十四年(二七二)意外に橋が老朽し危険なので、今架設してある橋の下流に新橋架橋が計画され、工事費を小田原馬車鉄道会社持ちで架設約定を結び、翌年新橋が完成した。

明治三十二年(二八五)鉄道馬車が電気鉄道に変更されるに伴い、中四間(七、二七米)に改修築された。二年経た、明治三

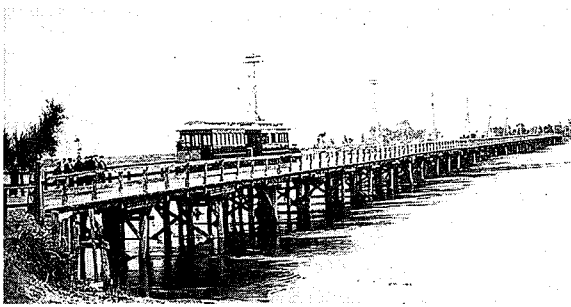
十五年(二九〇)小田原大海嘯の被害を受け、破損はしたが流出せず、大補修がなされた。

明治四十三年(二九〇)八月、出水で橋の中央部が墜落、修理された。翌四四年(二九二)七月、大土用波で海水が酒匂川を逆流、木橋一部が流出した。仮橋を架けたが、八月、豪雨による出水で、仮橋も、残っていた木橋も流出。

翌年新橋が開通するまでの八ヶ月間舟渡と徒歩ですごした。父、(明治二十九年(一八九六)生、平成二年(一九九〇)卒)の話によると、荷物を担ぎ駄賃稼ぎをしたそうだ。芋俵一俵二銭、米俵一俵五銭、若者仲間て稼を競い合ったが、一日一円は稼げなかったと。

明治四十五年(二九三)三月三十日、木製新橋が完成。名主を先頭に酒匂小学校の生徒まで村民の盛大な渡り初めが行われた。

大正三年(一九一四)八月三十一日、暴風雨にて流出。同九月四日仮橋開通。復旧補修がなされた。



酒匂橋を渡る電車 左手は網一色 酒匂は右手

大正九年(一九二〇)国府津
小田原間の電気鉄道廃
止に伴い、レールを外し
て老朽化した所を補修し
ている。

大正十二年(一九二三)今ま
での木橋では四、五年も
でば修理、架け替えをし
なければならぬので、
鉄筋コンクリートの橋に
架け替えられ七月一日開
通した。

当時酒匂大道に明治大
正の大通人として知られ
ていた平岡吟舟の料亭
「三望園峯龍」があり、
吟舟は二弦琴「東西曲」
の創始者で、即興で作詞、
作曲し、それをすぐ芸者

達に教えると云う人であ
る。

酒匂橋開通の時、期せ
ずして現在の白鷗中学校
入口の処に水産試験所が
出来たので、酒匂橋の開
通式と水産所の開所式を
いっしょに行った。

吟舟はこれを祝って、
「祝酒匂橋開通式、水産
試験所開所式」の歌を
作った。

酒匂橋ができたかえ
できたとも

長さは二百と十余間
こちや東海一の名橋
さ

どうだい立派だろう
ソラピーヤわね、
鉄筋コンクリートで
四角で丈夫で

上はアスファルト
で、
見事に塗り上げた

ここは水産試験所さ、
そうだと
矢羽根のかざりを

家の棟に当たる八方
海外の産物をなんでも
も集めて

ソラ仕事はね赤玉白
玉

風車でよせいし
御門のハイカラ

誰でも見に来い大歓
迎

まことに自由奔放の作で
ある。これが式の当日小
田原芸者連の出演で賑や
かに披露された。ところが、
この橋たった四十二
日の短命で、九月一日の
関東大震災で落下してし
まった。

直ちに仮橋を架けた
が、九月十五日の大雨で
仮橋が流出してしまっ
たのである。

大正十二年十月、大破
した元の木橋を修理補強
して、木橋が開通した。

この橋応急修理のため
か、橋板が隙間だらけで、
下駄の歯が挟まってよく
転ぶので、転び橋と異名
されていたという。

大正十五年(一九二六)元の
鉄橋の処に鉄筋コンク
リートで長さ三百五十七
米の橋が完成。五月二十
一日開橋式が行われた。

昭和四十七年(一九七二)七
月、集中豪雨が県西北山
岳部に降り、山北三保部
落は大惨事を被り、洪水
で酒匂橋も橋脚が水に洗
われ、中央の橋桁が一、
二米も降下し危険な状態

となったので全部架け替
えられ、翌四十八年二月、
竣工した。

その原因は、酒匂川の
砂利が良質なので、戦時
中は軍用資材に、終戦後
は復興のために大量に採
取された砂利の取り過ぎ
のためで、昭和三十八年
(一九六三)十月、県の土木課
より「河川の砂利採取禁
止」の通達があり採取さ
れなくなつたが、時すで
に遅く、この橋脚沈下と
なつたのである。

集中豪雨被害の概要
昭和四十七年九月
九月十五、十六日、集
中豪雨、猛威をふるう
七人が死傷

九月十五、十六日の両
日にわたる集中豪雨と名
古屋地方に上陸した台風
二十号の影響で、小田原
地方は大雨に襲われ各地
区に大きな被害をうけま
した。

当市では、ここ十数年
来台風等による大きな被
害はありませんでした
が、このたびの集中豪雨
では二名の犠牲者を出し
ました。昭和二十四年の
キティ台風以来二十三年

ぶりの被害となりまし
た。この集中豪雨による
被害の概要は、次の通り
です。

一人の被害 七人
死者二人 負傷者五
人

二 家屋の被害
床上浸水二八五棟、
床下浸水一、三五四
棟

一部損壊二〇棟 全
壊四棟

三 道路の被害 一五地
区二二箇所

四 農道・用排水路等被
害 二二地区一四一
箇所

五 田畑の被害四地区四
〇一ha冠水

六 河川の被害
市関係の堤防崩壊等
二五地区三二箇所

七 橋りょう流失 二箇
所

八 公共施設の被害 一
六箇所二三五戸

(『広報おだわら』昭和四七
年一〇月一日)
(つづく)

中村原郷 の思い出

⑤ 遠藤治郎

疫病

昭和七、八年の頃、赤痢が流行した。組内で二軒の家が赤痢にかかり、お婆さんと幼女が亡くなつた。昔は消毒液がな

と思うのは、私一人だけではないと思う。早く景気回復が出来てこんな悲しい話のない社会になり老人も充分な介護がされる世になつて欲しい。

田水番

中村原の柏山は、真砂で小川からの堰がなく、天水田が殆どであった。何時頃か丘に奥行三十メートル位の横穴が各所に掘つてあつて一年中同じ水量が出ている。現在は建設会社の手で砂利採取や工業団地の整理事業で数十町歩の田畑が消えて横穴も殆ど見当らなくなつた。早や七十年近い昔を語る人も少なくなつた。

今日は医学が進歩して赤痢で死亡するのは稀である。日本は世界で一番の長寿国とか。但し、物質文明の総崩れとかで年間の自殺者が三万人以上と聞いている。今少し命を大切に生きて欲しい

時間割りを知らずに自分の家の田へ水を引いてしまった。水番の人が家に来て、大人が盗水したら承知出来ないと言つて居られた。子供心に申し訳なく思つた。友人の句に「水盗む流れの音を計りつつ」がある。川勾の寺の小作で解放前に返したそうである。六十数年昔のことが思い出される。

槐えいじゆの木の由来

今から二十年前に友人の話で槐えいじゆの木を知つた。養父が上町山かみまちの雑木の中にある木は普通の木ではないと言つた。友人に見分してもらい槐と知つた。中井町の雑色に県指定の天然記念樹があると聞いて早速見に行く。保元二年(二五五)義円法印東国行脚の途路この地に休みし折、枝が発根して成長したとある。下中で魔除として床柱に使用してある家が、明沢で一軒、小竹下、小西各一軒、上町の小宮家の槐は真物で木の身が黒。禪龍寺の建設の時、大工に頼まれ樺の木を十何本か探してやつた。木挽きの話

では東北地方で大臣の家では槐の床柱を必ず使う。そうである。小生が禪龍寺に寄附した木はイヌ槐と言つて身が黄色をしている。根分けして現在禪龍寺の小作地に植えて目通り三十cm位に育っている。人の一生は短いがこの槐の木

冬の間には手引鋸で切り出す。普通は共同山といつて気の合った仲間二、三人から四、五人で組んで暮れの内に仲間人に頼んで見切り買う。日向山、日陰山または堅木の割合で価格を決める。坪当り幾束反当り幾束と決める。夜作業で薪を束ねる

(学名) *Sophora japonica* L.



花はなおどりおどり
文遠浅治史
写真矢野勇

エンジュ
東京の八重洲通りや山手通りなどの街路樹。その数1万7千本以上に達するが、存在感は薄い。排ガスに強く、伸びすぎないので街路樹向き。ふるさと北京の並木にも多い。漢名は槐。中国では学問と權威のシンボルで、最高の官位は槐位と称された。日本では平安時代の『今昔物語』に載る。

「朝日新聞」より

が数百年後に指定の記念樹となると思うと生きがいを感じる。

薪山

昔は何処の家でも風呂やかまどに薪を焚いた。

素縄を縛って置き、一月八日は山の神といつて、柿と餅を買い山に供えて、九日が仕事始めて半日位で仕事を終つて酒盛りをしたようだった。リヤカーの後押しに来

いと言われて学校が終つて山に行く。昔は農道や山道が坂が多く下り坂は刺棒をリヤカーの後ろに太さ三寸位の棒を二尺位出して結び、ずらしながら下がる。薪や粗朶を積んだリヤカーを後押しした思い出が昨日のようである。

又、粗朶儲けといって薪は山主に渡して粗朶を貰う。当時は土木作業もないので遊んでいるより良いといつて山に入った。薪の仲買商といつて町へ売る薪屋という業の家が有つた。

割山開墾

昭和の初年頃、山地主は、開墾して蜜柑を植え始めた。養父今年は何処の割山開墾があると言つて暮れの内素縄を張り傾斜の山を幾段かに開く。割山開墾は手間賃はなく、薪山の終つた裸山を開いて根株を手間賃に貰う。また、三カ年間は無賃で耕作出来る。新地の故かり芋とか生姜がよく育つたようだ。山主は二年目位に蜜柑の苗を植え付ける。堅木の根株は

斧で細かく割つて風呂呂に焚く。風呂焚をしていて、バケツに水を張つて燻を水に入れて炭を取る。炭の取れが少ないと言つて叱られた思い出がある。

大地主は、昭和三十年頃には蜜柑畑を二町歩も耕作して蜜柑成金となり、住宅の新築を始め、蜜柑御殿と言われた。三十年頃からプロパン瓦斯の普及で薪か根株を焚く家も少なくなつた。山によつては根株を積んで置くと自然椎茸が生えて、米の磨汁をかけると厚くて大きいのが生えて子供心に嬉しかった。

溝の把

中村原下河原に水田が八反歩程ある。字堰の上に塔台川の河水を利用する堰がある。昔は杭を打ち込んで「トバ」と言つて女竹を苦竹二つ割で結び長さ二間位の川幅に造り杭にあてがい筵を当て砂を寄せて高三尺位の堰を造り川水を揚げて溝に流入させる。この溝を把う行事があつた。昭和三十年頃コンクリートの堰が町の助成等で出来、板

を差し込むだけになつた。裏作の麦の収穫が終つて六月十五日に溝把い。八人の地主が出て午前中に作業が終る。近くの久保寺酒店から一升買い関山魚店で酒盛りする。昔は押切の浜で地引網。一網に小鰯が四斗樽二杯位捕れる。小魚は肥料に大きき目はすし種に作つていた。早速刺身用に造つてもらい酒盛りとなる。今朝捕れた新しみのあの鰯の味を今でも思い出される。昭和四十一年に前川より丸い食品の買取で水田がなくなつて溝把いの行事もなくなつた。

羅宇挿げ

昔は煙管で刻み煙草を吸う人が多くて、養父は羅宇挿げで小遣いを稼いでいた。村中の人が折れた煙管を持つて来る。紙袋に名前を書いておく、雨が降つた日、数本溜まつた煙管の羅宇挿げをする。子供の頃養父の仕事を面白く見ていた。羅宇は雑貨商が卸したもので長さが一様ではなく、また、模様が異なる。

長火鉢に炭をおこして煙管の金の部分を半分程焦がして折れた羅宇を抜き取る。

炭火の下の灰の下で充分暖めた若竹の軸を一節残した長さ一寸位の竹筒に綿を詰め油を浸したものに、羅宇を差し入れて油を付け檻の木の板に幾つも異なつた穴に順に入れ絞る。三回位して煙管の金具に合わせて嵌める。余り絞りが過ぎると金具が割れると語つていた。金具が割れた場合は買替えたりもした。その頃の修理費は何銭か記憶にない。また、脂掃除と言つて細かい針金で良く突き和紙を繕つて煙管の頭の方から抜き取つた。

荷馬車

昭和十年頃迄馬車引きと言つて、国府津駅から肥料や麻袋に入つた米、または村の農産物を運ぶ運送業の家が中村原だけでも二、三カ所あつた。今から三百年前に古書に前川の渡しがある。中村川と塔台川が下河原で合流して前川の海に注ぐ。今の東海道線の側に

古の地形が残っている。その後、大洪水で羽根尾山西の境が砂地のためか押し流されて、中村川が押切の海に灌いだため、地表が十数メートル下つた。昭和十年の大洪水で三軒の水車が台地上がつて、二軒は電動の水車、一軒の農家は、水車小屋を十数メートルの坂道迄を持つていかれた。昔一軒の水車家の馬小屋が火災で馬が焼け死んで、馬頭観音の石碑が畑の隅にある。中村川の飛地に部落共有の馬捨場約二十坪程があつて、病死等の馬を埋めたと古老が話してくれた、今は開発が進んで近所迄住宅が建つていて昔の地形が分からない程になつている。

訂正 前号No.一八六について、次の箇所を間違いましたのでお詫び申しあげます。
〔訂正箇所〕
22ページ1段後から10行目
(誤) 資金三百円
(正) 資金三百万円

波多野一族の西南進出の夢

澤地英

そもそも秦野地方の国人である波多野一族が、西南方向の相模湾へ、眼を向けていたということから、話を始めなくてはならない。現在波多野城跡と公認されているのは、国道二四六号線の名古木信号を左折し、丹沢ヤビツ峠経由の蓑毛の道を登って行つて、一處で再びY字路を左折すると、西田原方面へ行く道となる。右手高台で小学校、左手に谷戸と思われる低い田園が広がって、その谷戸の向う側の小高い丘が、目的地の波多野城跡である。なお名古木で左折せず、東へ直進すると一處行つたところに、かつて伊勢原地方に通じる郡道となっていた善波峠となる。これではあまりにも東へ寄り過ぎる。このような場所、果たして城を築くことが、可能だったかという疑問があり、どうも納得がいかないのがある。ちなみに右手の小学校の高台から眺めると、城跡は見下ろす位置にある。

『大野誌』によると粕屋党と呼ばれる者は、四宮、大井、白根、高森、朝岡、善波氏と続く。藤原冬嗣五世の孫如丘が相模守と

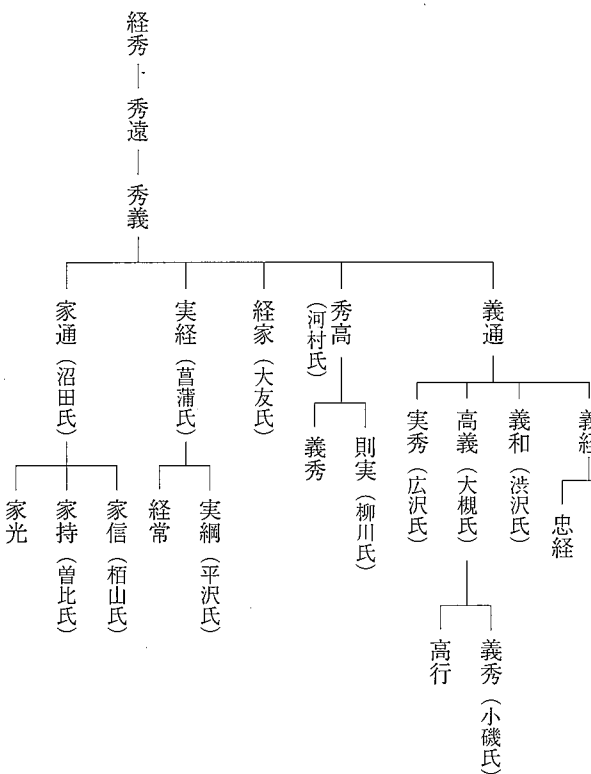
して下向し、任期満了となつても京都へ帰らず、伊勢原粕屋に居住し地方豪族となり、その子太郎元方が粕屋氏を名乗り、武士となつたといわれている。粕屋党は要するに分家なのである。

善波峠を越えた伊勢原地方の上粕屋に、関東管領の扇谷上杉定正の居館があつた。家宰の太田道灌が実力者であつたばかりに反逆の疑いをかけられ、この居館で謀殺されたことは有名である。仲の好かつた山内と扇谷が、それ以降不仲となつたということも知られている。粕屋から南四キロ、平塚寄りに眞田と岡崎が城を構えている。眞田、岡崎というと扇谷上杉の息のかかつた三浦系豪族である。三浦氏は名族であり、頼朝挙兵の石橋山の合戦に参加している。血統は華麗であり、扇谷上杉の分家でもあつた。

三浦一族のうち義明の弟義実が三浦半島を離れ、大住郡の岡崎城に入った。この地は同じ垣武平氏の中村氏の勢力圏に入っているが、義実は中村莊司宗平の女婿となり、相模中央部への進出を図っている。義実の子息義忠は眞田城に、同義清は中村氏の養子となり、土屋氏を名乗っている。中村氏は足柄上郡の中村莊を本拠地とする中村宗平を棟梁とし、一族は土肥郷へ進出して土肥氏を、土屋郷に進出して土屋氏を、二宮莊に住んで二宮氏を称したといわれている。

下野国押領使として、東国へ下り、その子孫の一部が相模国に土着し武門となる。すなわち秀郷の五代後裔に公光、その子公俊と二代続いて相模守となつた関係から公俊の子経秀の時、秦野郷に住み波多野と称したといわれている、この二代豪族のうち、波多野十三分家と中村分家を図示すると、左及び次頁のようになる。

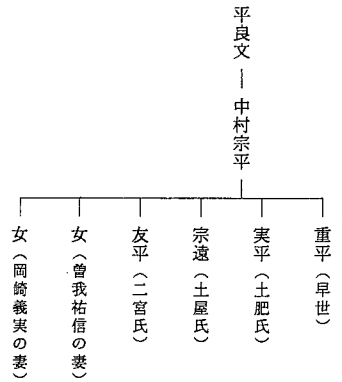
〔波多野氏〕



一方、波多野氏は、平安末期俵藤太藤原秀郷が、領守府將軍

ごらんの通り波多野一族は、主として分家したのは、長男であり、二男以下は世襲している。そして十三分家中特筆すべきは、総本家の惣領有経が松田氏になつたことである。松田郷が

〔中村氏〕



如何に重要拠点だったか証明されよう。なお、本家筋からは、渋沢、大槻、広沢、平沢氏と同一地区内であったが、分家筋からは、河村、松田氏と足柄上郡地方へ、大友、沼田、栢山、曾比氏は西南の小田原地方へと進出している。もともと栢山、曾比は酒匂川河原筋で洪水というリスクに見舞われ、沼田は低湿地域で深田というハンディをもっていた。中村一族は一足早く海へとあこがれ、はるかに遠い伊豆地方へと土肥氏を進出させている。波多野氏の西南進出の夢は、中村氏に倣ったのではなからうかとも思われる。

何故武将が分家政策により所領の拡大を図ったのかというと、これは荘園制度から説かなければならない。

大寺社の所有する寺田があった。ところが天平十五年(七三三)墾田永年私財法が公布された。荒地を良田に開墾することで、荒れ地に立ったが、田祖が免除されるという特権が与えられたことで悪法となった。この影響で在京のまま地方官を希望した受領国司が減り、どんな遠い国でも赴任した遙任国司が増加した。こうして十一世紀から十二世紀にかけて、地方豪族層による開発が行われたが、彼らは開発私領の支配を、より安全にするため、中央貴族や大寺社を領家と仰ぎ寄進するようになった。十二世紀末に成立した鎌倉幕府は、御家人を地頭に任命した。地頭は荘園の一種で、荘園領主の年貢徴収、土地管理を一任した結果、荘園領主との間に紛争を繰り返した。十四世紀前半南北朝内乱で、荘園公領に大きな影響を与え、このため止むを得ず、守護に荘園年貢の徴収を請け負わせた。守護は任国を領国化し、その支配を世襲することになった。家臣を編成した鎌倉時代の守護とは性格を異にするまでに成長した。世に云う守護大名である。

惣という村組織に変わった。十六世紀全国は群雄割拠が進むと、荘園制度は実質的に次第に失われていった。それに伴い荘園領主の荘園支配は、殆ど実態のないものとなった。そして戦国大名による地域の一元支配。土地に対する複雑な権利関係の整理、年貢収奪体系の再編により、荘園は一層実質を失い、十六世紀末の太閤検地が荘園制にとどめを刺したのだといわれている。

大雑把にいつて荘園制度は、時代と共に変化していったが、朝廷の御所を警固する番犬役の武士が、領国支配をするまでに成長したのも荘園制だったのである。

『吾妻鏡』によると、頼朝の石橋山挙兵から四十年経った承元四年(一一三三)六月二十日、丸子川(酒匂川)の河原で河村・松田党と土肥小早川党が納涼を行った際、互いに自家の先祖の武功の勝敗を論争した結果、多年の反目が爆発して喧嘩となり、ついに籠城して一戦構えようという事件に発展。幕府の命で和田義盛らの仲裁により、ようやくおさまったという、世に云う「丸子川の騒動」が起こっている。考えてみると、ただ単なる武功話云々ではない。石橋山合戦に敗れ、真鶴岩から房総方面へ、イルカ船で生命からがら脱出した際、海の戦士土肥実平の活躍は顕著で、戦後所領安堵のほか加増、将軍家のおぼえもよいという。

『足柄上郡誌』によると、この土肥一族に対し、松田有経の子政基が一族を率いて和田義盛に応じ、幕府軍と闘った。和田合戦で和田軍は敗れ、松田一族はことごとく討死したにも係わらず松田氏の勢力は衰えず、やがて後醍醐帝の討幕運動へと発展。六十年間南北朝動乱の始まりとなったが、南関東が皆北朝になびく中で、最後まで松田一族は南朝方に弧忠を守ったという。強靱な反骨の伝統をもった氏族と云われている。

河村氏も松田氏同様鎌倉幕府に不満をもった家柄である。さきに石橋山合戦で河村義秀は、大庭景規の求めに応じ、頼朝と闘い、戦後河村郷の所領を没収、梟首される筈を許されて、建久元年(一一五〇)九月に至りようやく旧領を安堵されるという土肥氏とは正反対の立場に置かれていたのである。しかし、さらに探求してみると、波多野一族の西南進出の夢が、競争相手の中村一族の一足早い対策によって着実に格差をつけられてゆく焦燥と羨望とねたみからみ合っ

て、丸子川騒動へと発展したの

ではないかと考えられるのである。

そうこうしているうちに応永二十三年(二四六)関東管領上杉禅秀(氏憲)が、鎌倉公方足利持氏と不和となり、將軍足利義持に不満の弟義嗣が同調して共謀挙兵となり、世に云う「上杉禅秀の乱」が勃発。禅秀は敗北し禅秀に加担した地方豪族の沼田氏を始め周辺の曾我、中村、土肥、小早川、土屋氏は、持氏により所領を没収され、大森氏に与えられた。追い打ちをかけるように大森氏は持氏の命により小田原関所の管理や河村城の地盤を確保するなど、酒匂川西岸の支配を掌握したといわれる。最南端の進出を図った沼田氏が滅亡し波多野一族の夢は挫折した。不連続きの波多野一族だったが明応四年(一四九五)北条早雲の出現で、松田氏はひそかに早雲に加担し、息を吹き返した。多少強引過ぎるだまし討ちではあったが、宿敵大森氏が伊勢原へ逃走した。小田原城主となった北条氏は、功績を認め藩中第一の所領持ちとなった松田憲秀に対し、長年の夢へと着実に歩んでいったが、豊臣秀吉の小田原征伐は、同盟破棄の結果を生み、後詰め伊達氏のシナリオを失って北条氏は敗北。当然の如く松田一族は裏切り者となり

滅亡していった。波多野一族は中小領主層の運命をまともにうけ、紆余曲折への道を歩んだが、最後の頼みの綱の松田氏が失脚した。領主は決断によって滅亡するはかない運命を持っている。とは云え好漁場と、また貿易港として交易をもたらず夢の海へと進出を果たすための歩みを続けていたのではなからうか。

滅亡していった。

郡境を接する善波峠に近い名古屋から山坂を登ってゆくという秦野地方東部の地点で、情報連絡を適切にする山城の位置は、生死を分けるには重要拠点であり、高麗人などが国に亡命してくる際の大陸地点であったといわれている。大磯の東を花水川が流れ、すこし上流になると金目川と名を変えるが、この先が名古屋である。名古屋の先に亡命の漂着先の東田原があったと思われる。

田原ふるさと公園農村広場整備工事に伴う東田原中丸遺跡二〇〇〇―三地点の発掘調査が平成十二年九月に行われた。この地域はさきに古墳時代の住居跡や中世の墓が発見されたことがあり、二回目の調査であったが、今回の調査で古墳時代前期の竪穴住居跡や中世の掘立柱建物跡が確認。建物跡からは中国製の陶磁器「白磁」や青磁又は国産の陶器かはらけ、白かわらけが出土した。この建物群は平安末期から鎌倉時代前期までに使用されたことが判明し、波多野一族の屋敷の一部ではないかの調査結果となった。

さて東田原に立つと秦野盆地を小規模にしたコピーの地形であり、亡命先の地点としては似合いの隠れ里だったと思われる。この証拠に近くに源実朝の首塚があることでも証明されよう。各検討した結果、果てなき夢を持ち続け、夢破れた波多野一族を思うとき、現在の波多野城跡は、その一族の屋敷跡として承服出来かねるのである。

落穂集

◎今夏の暑さは異常。アイドリングストップ運動も一時はストップする。しかし、デジタル時計の文字が消え空調がきいて涼しい機内に戻って漸く表示が元にもどる程の中近東ドライブの暑さにはかなわない。ところで、スーパーの買い物は日中の暑さを避けて夕刻の時間帯に替わる変化があった。何時も客で混み合う「さがみ信用金庫」本店も酷暑の午後は、客足はまばらの現象。日本列島を総なめにしたノロノロ台風11号は、去る八月

二十二日午前十一時半、伊豆半島の土肥に再上陸したと気象情報には伝えていた。小田原にやって来るのは何時かと待ち構えていると、知らぬ間に通過した。風はあまり強くなく、雨もさほど降らなかつたためである。それも台風の時速が自転車の速度並で雨が長時間降り続け、小田原を通過するときは雨の元が無くなったような。これも酷暑と共に異常気象で片付けられればよいが。◎このごろ、若い女の子が腰にバックをまつわりつけているのを、ちらほら目にする。そのバックを何と云うのか、娘さんらに尋ねてみると、ウエストポーチとヒップバッグと二通りの返事があった。ウエストポーチと呼んだ方が趣きのある表現だが、腰に大きなポーチを巻き付けているので、ヒップバッグと云った方が相応しいのかもしれない。ともあれ一つの流行である。それも娘らの気まぐれな一時的な気配なのかこれから爆発的に流行る兆候なのか、何れにしても分からね当代の若者。自己存在の主張があるにしても。◎本号から活字が大きくなりました。行数は変わりませんが1行の字数が減り、当たり5段組で11字に2百字詰原稿用紙で約4枚16行に、4段組で14字原稿用紙で4枚18行となりました。

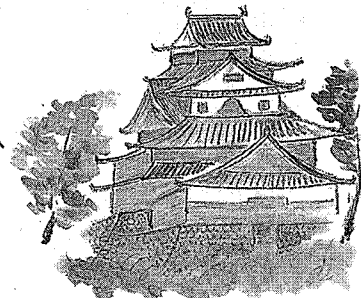
古城巡記

⑤



松江城

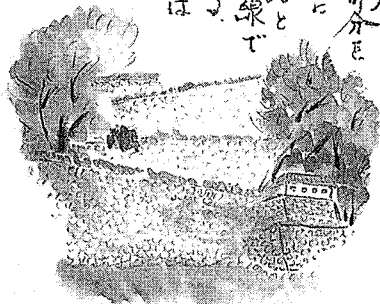
奥道開けの近き急田山(標高八八米)にぞいさう天守櫓は、中街のどまりでも見ることができ、山陰唯一の古城である。



慶長五年(一六〇〇年)堀尾吉晴が岡原の合戦の功績により富田城に入つたかぞり後奉府の許可を得て慶長十二年(一六〇七年)この地に築いた。平山城で、完成までに五年を要した。

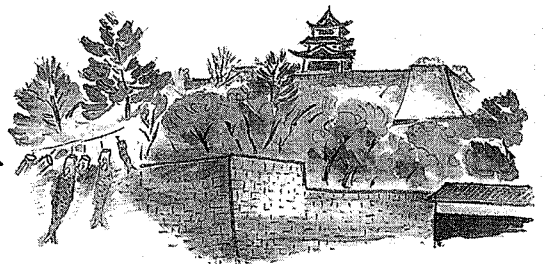
天守り比較的規模が大きく、城郭建築の最盛期に造られたとてあつたが、同じ頃に造られた姫路城の天守り比べて二層の櫓を二つ重ねて、その上に望櫓をうせる古式のものや、入口に櫓をつけただけの単純なつくりといわれている。全体的に運く厚い蒔板(下見板張り)でおおわれていて、寛政本位で式骨に感じ、その守り足風がある。石垣は半蒔板かといつて、石の大きき部分に内、小まな面と表にあつて一見粗雑に見えるが、石垣の隅には塙土を積みかたといわれ、石垣の勾配は力強い直線、中腹も凹んで古式が見られる。山陰の水が都といわれ、松江は城を囲んで、水濠の水も豊満で、芒草と衣加こ、安道湖と併せて落着いた街である。

享和元年四月十六日



丸亀城

香川県丸亀市にあり、天正十五年(一五八七年)に讃岐十七万石を以て入封した生駒親忠によつて慶長二年(一五九七年)に西讃岐の押さへとして築城されたもので、高松城より古く、現存する三層の天守は、一六二〇城令による廃城となつたが、寛永十八年(一六四一年)に西讃岐に入封となつた。



山崎素行によつて再興されたが、特に印象的なのが、城の石垣の見事さである。

丸山王利用した城山に蜂巻式の無量堂を築かれた石垣のまな他、城には見られる。石垣の造りは、そのまなは、林のまな、三十年ほどかかると言われた城郭。だけある、一門から天守までの登り、曲り、途中で二、三回休まらなければならなかった。丁度四月末、大嵐が来た。鯉のぼりかきかき加印象的であった丸亀、駅前、おぼろも娘さん切り、小石小石證城といふ人々味はまた格別であった。



享和元年四月二十三日



編者註 松孟は小栗良英氏の雅号である。

酒匂上輩寺三十四世桜沢堂山の研究(八)

谷口得二

安政二年開板本は、処女作品群中に「紅英堂」板本がないのが、不思議に思われるが、「箱根靈驗覽仇討」が、あるいは「紅英堂」板であるかもしれないと推致してみたいのは筆者一人でもあるまい。

明確に安政二年刊の作品は左記の二点を挙げるができる。

旅雀我好話・全七編 梅蝶楼国貞画
仇討亀山嘸・改印「寅壬七」右同画

「旅雀我好話」前年の嘉永寅七月の中村座での上演に於じての作品である。全七編をともし角もこの安政二年中に全部板行した「種清」の馬力は驚くばかりである。

これが全部一度に発行された訳ではない。初(上)の序文末に「嘉永八乙卯新刻」とあり、七(下)の序文の序末には「嘉永八乙卯年初春新刻」とあって、改印は、初(下)までが「寅七」、四(下)「五寅壬七」、六「寅八」、七「寅九」となっている通り、おそらく製本

済次第、個別に発販されたものと思われる。内容に就ては、「早稲田文学」昭和二年十月「草双紙特集」号の渥美清太郎「歌舞伎小説解題」で「種清」作品の多くを解題紹介しているが、本書は誤解されて「三編読切」と記述されている。本書の「初(上)」の序文中に、

「此旅雀我好話八百までもおどり忘れぬ十扇舎が戯作の中の大利お宿は何所ぞ中橋へチヨツチヨと御用の有松絞亀山染の仇討を綴合せし新行ハ狂言堂が夏仕入それを紅英堂の注文にヲツト喜多八と諾ふて弥次郎兵衛が野子馬……」とある通り狂言作者桜田治助の原稿によつて安政元年七月、中村座で上演されたものに応じて書き直されたものである。しかも「正本写」の本領として、この「合巻本」には渥美清太郎の「歌舞伎小説解題」が指摘しているように、本文の筋の亀山仇討もの、脇役として弥二喜多の登場が前半で中途半端になっており、後半での活写が多い点、「種清」の一存によつて料理された特質も見逃せな

い。しかし一般読者にとってはこのような記述と、長編歌舞伎小説がどこまで求められたか、役者の人気の生長とも勘案して、はなはだ疑問が残る。

その疑問をそのまゝに、「正本写」は以後略々、三編読切りを標準として板行され続けて行くのである。

「仇討亀山嘸」安政二年七月廿七日よりの河原崎座興業の上演外題が、板元か「種清」かの耳に入っていたものであろうか。改印が「寅壬七」であることは、いやでもそのように理解せざるを得ない。しかも、この説話についての「種清」綴るところの当年刊の草双紙は四点もの多数にのぼっていたのである。しかし、どのような訳か、本書は、岩波の「国書総目録」にも不載の作品であるが、「演博本」(早大)によれば奇妙にも表紙に「笠亭仙果録 続き里 梅蝶楼国貞画」が板刻されている。中本全四十四丁、全一冊であるが、巻末には「柳水亭種清作 梅蝶楼国貞画」があり、裏表紙見返しには左記の広告を見ることができ

(一) しん大助 名高(種清綴) 千歳の松台也 対男(国貞画)

本書は翌安政三年に「名高毛毬 諷実録」と改題されて板行されている。しかも扉には褒め詞も

過ぎる「三亭春馬」の寄せたる序文がある。

「そも此編の作者柳水亭種清大人は彼魁作者の柳水門よりながれいでて既に戯作家中の大河となんなりける呼鳴この人や文才のすぐれし事普通にこへたれば終に滄海となつて買手の入船ひきもきらず書房の門戸を賑はずならんと只思ふまゝ、をしるしてもつて序となす

まつりごとやすらけきふたつとのしのはる 三亭春馬述

まず不審に思われるのは、巻末の「種清作」なるにも拘らず、表紙の「仙果録」とあるのを、どのように解釈するかである。強引にこれを追求してみるならば、「仙果」録する所の原稿によつて、「種清」が綴り直したと解するか、それとも「仙果」の名声を板元に利用して記録したのもあろうか。「種清」を推す春馬にしても、初代「春馬」は既に嘉永四年に歿しているから、これは二代「春馬」と理解しなければならぬ。だが、それにしても正体不明の二代「春馬」が提灯持ちしても、どれ程の効果があるのか、表紙の「仙果録」の記録と合せて、これらを推考してみると、むしろこれは、初代「春馬」めかして、この序文が書かれた疑いの方が強いのである。

△甘泉堂 板元蔦屋吉蔵の戯作者確保が「種清」にも及んで、兄弟子の継作ではあるが、二点の作品が、この板元から、その年開板されている。

○踊形容花競 四・五編 改印
四先(寅八)・四後(寅十)

一陽齋豊国画

○風俗浅間嶽 三・四編 改印
三(寅七)・四(寅十) 一寿齋国貞画

△踊形容花競の第四編は(先・後)二冊各十二丁で、(四)先の序末に「嘉永七甲寅仲秋」とあっても、改印の(八月)からみれば、この序末の刊記は発販売日を意味していないと受容されるので、慣例としての翌安政二年新春刊が妥当なところであろう。この四編先後の各冊の四ウ各本文始めの内題は、それぞれ「天地人東路評判先の巻」(五十三)、「花東道四編後の巻」であるが、これも改印が示しているように、前年の嘉永七年八月四日よりの河原崎興業「吾婦下五十三」に対応して上梓されたものであろう。また五編の四ウに「初楓扮戯子評判」とあるのは、嘉永七年八月廿五日からの中村座「初紅葉小倉色紙」の興業に対応してのものとと思われる。

○「風俗浅間嶽」同門の兄弟子「柳煙亭種久」によって記され、

嘉永七年に初・二編が発販されているが、初編の「種員」の推薦序文中に「此書ハ先師柳亭翁が文化の頃著述せる「浅間嶽面影草紙」と世に知れたる「読本」を「稗史」に綴と書房の需を「種久子」が承諾つ予校合をし……」と記述されているように「種久」の大長編ものとなるものが、何の理由か、途中で「種清」に代えられたものである。しかもさらに問題を含むのが第三編の筆者である。即ち詳細を記すと、その序末には「柳煙亭種久記」、上・下巻末に「種久抄録」と記されているにも拘らず、袋絵には「種清作」、(三)上、表紙に「柳水亭種清作」、同見返しにも「種清作」、(三)下見返しに「種清抄録」と記されている。この矛盾を説明するのは極めて難しい課題である。

しかし筆者の独断による理解として、次記のような推理に考えられるのではなからうか。まず序文中に、「恋が菩提の種本を種の種なる孫種が毫の型もて甘泉堂の梓上に三度まで植安たるを見上らせ玉へ」と種久が記していることは、種久の筆が全く加えられていないことはないと考えられる。造本の工程からすれば、表紙・袋絵は確実に最終段階なので、これに板元の意味が加えられたことは疑うべくも

ないが、甘泉堂ともあろう江戸の大書肆が、いかに新人「種清」に当人人気があるうとも、「種久」の面目をつぶしてまでも断で「種清」作と変えるだろうか。背反する両表記の一方だけを虚偽なりと断定する資料もない状況では、やはり調和させる理解として、「種久」の代作または下請けを「種清」がこの第三編から始めていたと考えることもできるように思われる。そしてそれを企画し熟知している板元は、四編以後の「種久」摺筆から「種清」執筆への転向をそれとなく宣伝する為にも最終工程での表紙絵に肯て実質的な代作者たる「種清」作を刻させたと考究したのは誤りであろうか。

△金松堂よりの開板

金松堂 辻岡屋文助の努力は大書肆を指して必死であった。問題点を抱える「初紅葉小倉色紙」を一応この年に含めて数えると三点の開板が認められる。

蝶衛亀山染 初・二編 改印(卯八) 梅蝶楼国貞画

都鳥汀松若 二編

初紅葉小倉色紙 五編

○「蝶衛亀山染」亀山物の歌舞伎上演の「正本写」であるが、所見二点の国会本・青山鳳鳴本とともに三編である。しかし、

前記の「早稲田文学」の渥美清太郎「歌舞伎小説解題」によれば「五編続き」と記されており、また山崎麓「日本小説書目年表」(昭和四年刊)には安政五年の項に、この第四編の板行を載せているのみで、第五編については記載は以後のどこにも認められない。ただし本書第三編(下)の巻末には、「四へんへつづく」と記されているので第四編の存在の可能性から、さらには、先記の渥美清太郎氏の「改題」による第五編の完結までの板行も確実に認容される。それについて、かの「改題」には「次手に二番目の「袖裏故郷錦」大阪狂言の花徳まで書き込んである。縁もゆかりもない二番目狂言まで一つの冊子に組み入れたのは、これが初めて、いよいよ芝居中心に傾いてしまった訳だ」と記される狂言が第三編までのどこにも見当たらずからである。もとよりこの第五編の発刊年については依拠するものが何もないので全く今は不明である。

三編までの所見国会本によれば、改印は全部が「卯八」で、初編の袋紙には「安政二年秋日発販」があるので、上演に合わせたの発売ではある。山崎麓日本小説書目年表」を始めとする諸年表の「安政三年刊」は訂さ

るべきである。なほこの袋紙の絵は「一驚斎画」が刻されており、表紙見返しにも「安政二初秋新刊」があった。さらに二編の発刊年についても、序末に「乙卯初秋新発」とあるので、初編と同時刊とみてよいであろう。そしてこの序末下方に「柳水亭種清(描印)」とあって、この新出の描印は、この後、彼が常用した「北民出」印であった。

この印が如何なる意味をもつて愛用したものか、三田村鳶魚、河竹繁俊はじめ多くの先人諸氏は、彼の生国が越後であると誤信してきた故に、「北国の民の出」と解してきたのではなからうか、今日に於ては、これを「江戸の北の出」と理解するのが正しく、戸籍面をみても、浅草下谷辺の出自を証するものとして受容すべきではあるまいか。なほ彼の描印の初出については、「亀山敵討」の描印が最初のものと認められるので、その初出の改善が試みられた結果が、この「北民出」印と理解される。本書の後摺本である青山鳳鳴本では、第二編の序文の改印は初摺本と同じく「卯八」のまま、にして、刊記のみを埋木改刻して「安政三丙辰年春新発」としていた。又後年の明治十四年七月三十一日よりの中嶋座興業に合わせて「仇桜亀山奇談」と改題

された東大本・天理本も存在している。

△錦耕堂開板には、錦耕堂板元山口屋がどのようにして「種清」に接触してきたか、詳細は定かでない。戯作の師筋にあたる「種員」からか、「河竹新七」からか、あるいは絵筋の師たる「国貞」か、それとも板元山口屋藤兵衛が直接頼み込んだのか。左記の中本型読本風草双紙がこの年も遅く刊行されたものと思われる。

東海道天日断 改印(卯正) 立川斎国郷画

一オ序文中に「河竹大人の塩梅より不律(ふで)の料理の五十三駅……安政二卯年歳発兌 柳下門士柳水亭種清」とあり、次が巻端口絵一図、二ウが本文始まりで、内題が三行角書で「天日房、地雷太郎、人丸於六」が記されている。本文と見開き図が交互にあつて、全三十四丁の、凡そ「合巻本」体裁と異なった板本である。おそらく前年の嘉永七年八月四日よりの河原崎座で上演された「吾嬬下五十三駅」の河竹新七の「正本」からの改作であろう。但し表紙見返しに「当ル正月二日ヨリ東海道天日断、柳水亭種清作、歌川国郷画、錦耕堂山口」とあるが、この「正月二日ヨリ」に該当する興業が、「歌舞伎年表」には見付る

ことが出来ない不審が残る。

(つづく)



古文書講座 35

酒匂川の舟運

—元禄期の反対運動を中心に—

内田 清

◆酒匂川に舟運があったか

酒匂川は近年まで「あばれ川」として、悪名ばかり高かった。また現在でも上流部の景観・各種の堰堤や枯れた水流を見れば「酒匂川の舟運」など考えも及ばない主題である。

研究史を見てもこの主題のものはかつてはなかった。『神奈川県史』や流域の自治体史でも、「資料編」に1・2の史料を掲載しても「通史編」では、今でも無視されている。

私は一九七五年に『小田原地方史研究』7に「酒匂川の引船」という小論を書いた。しかし、日本交通史で近世を特色付ける河川舟運の発達、酒匂川流域にも問題を残していることを紹介するにとどまった。

今回は、古文書解読から研究への過程と、通船認可や村起し等を現代的視点で見直してみたい。

◆変な史料や文字は原文書に当る

或資料集に「明和七年六月 酒匂川舟運願いについて矢倉沢村外四か村が異議を申立てる」という見出しと「竹下・矢倉沢・荻野岩・同一色・関本の矢倉沢往還沿いで駄賃稼ぎする村むらへ、藩が障害があるか

どうかを問い合わせたもの。酒匂川の舟運はすでに元禄一〇年(寛五)にも願出が出されている」との解説がついている(第二)史料がある。内容の要点は次のようである。

- ①水田に支障のある4・5・6・7の四か月は舟の運行を停止する。
- ②駄賃稼ぎの主荷物茶の運搬と重なるので駄賃稼ぎに影響は少ない。
- ③水が沢山の時運行するが、相談の上益金で補償をする。
- ④二人乗りの舟頭(せんどう)の高瀬舟を運行し、副舟頭達を下層農民から採用する。
- ⑤なお五か村が難渋した場合は、益金が出なくても少しの助力はする。

という内容である。したがって第一に、五か村が異議を申立てたり、藩が村に問合わせたりした文書ではなく、舟運出願者が反対者説得策を書いて藩に出したものであろう。

次に史料の表題も、差出人・受取人・作成年月も書かれていない欠陥史料である。しかし注目すべき内容の古文書ではある。

第三に編纂者が「明和七年(七五)」とこの史料の年代を比定した根拠が不明である。七〇余年前の出願でまだ

争っているのも可笑しい。

このような史料に出会った場合、編纂室で写真版等を確認する手もあるが、第一は原文書を直接確認する事である。所蔵者矢倉沢の田代家を訪ねてみると、断簡のような古文書2点が発見された。

問題の第一史料(A)は、やはり年月等のない欠陥文書だったが、別の第二史料(B)には「元禄十一年寅ノ」と年代があった。共に筆跡・用紙等が似ていて、後者が反対派三か村段階での文書なので、私は「南足柄市史」3P435に「(元禄二年)酒匂川通船につき出願人の口上書」と反対三か村の要求書案」の見出しで2点をA・Bとまとめて掲載した。要するに、元禄十年作成かとも考えられる第一史料は、出願人による文書を、反対派が写しておいたものと認定した訳である。編纂者の付けた史料見出し等を鵜呑みにせず、原文書を読みこなすことである。

◆藩と反対派の文書とその背景

「二六九七(元禄三)一〇 酒匂川を駿河国(静岡県)御厨まで川舟で通行する願書である」と、酒匂川の舟運を最初に指摘したのは、先輩故内田哲夫である(『年表小田原の歴史』一九三三刊)。その根拠は小田原市成田の村山家文書で、「御留用」に綴られていた。写真版がそれで、第三史料と呼ぶが作成年月は一番早い。『神奈川県史』5(一九七三刊)には、「酒匂川より駿

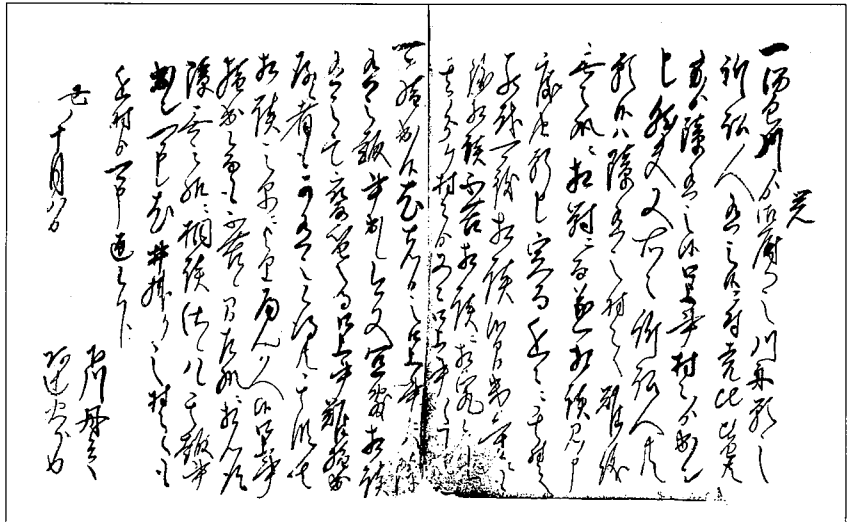
河国御厨へ川舟願につき故障有無申立方申渡覚」の見出しつきで掲載されている。しかし「故障有無申立」でなく「交渉結果報告」を代官と見られる下川・阿辻が指示したものであり、要点は次のようになろう。

- ①舟運区間は酒匂川から御厨。
- ②十月以前に村むらが反対の口上書を小田原藩に提出した。
- ③出願人は村むらと現地交渉する事につき藩の理解を得た。
- ④藩は村むらへ相對相談の結果を口上書にして出す指示をした。
- ⑤藩は舟運実現の姿勢で反対派五か村や用水利用の村へ布達した。(受取人は書かれていないが内容からこう考えられる)

藩は一見中立的に見えるが、反対派の転向を望む姿勢が見え見えである。藩としては、相模川のように「五分の一運上」という流通税を徴収出来れば、陸上の「十分の一銭」より税収が増えるからであろうか。

下流左岸で鬼柳堰利用の成田村は、当初反対派だったらしい。しかし十一年へ年を越した第二史料の頃になると、反対派が縮小したらしい。スペースがないので、史料は「南足柄市史」3P四三六で見ていただくことにして要点を記す。

- ①三か村の茶・炭・下駄等の駄賃収入は年間三〇〇兩程である。
- ②舟主(江戸者)のいう運行停止四か月間は、流量基準と荷物留置きでなし崩しにされ、駄賃取りは困難



下川丹兵衛
 十月八日
 阿辻忠右衛門

なる。
 ③年間運行していいから、舟主は三千両を藩に預け、年々三〇〇両を藩から三か村に支給するようにしてほしい。村継ぎ人馬等を代わってくれれば二〇〇両でよい。
 ④だが本心は、前々どおり日銭で駄賃取り出来るようにしてほしい。
 この文書は年号はあるが、史料表題も差出人・受取人もなく、抹消文字もあるので、矢倉沢ら三か村が舟

主や藩に出した要求書の下書きである。藩が指示した交渉結果報告の口上書の次の段階、反対派が切崩され、三か村が孤立しつつある情勢下で、「負ければ舟運賃より割高な駄賃取りはなくなる。」との危機意識で巨要求を掲げた抵抗の願書の草案と見られる。
 さて、江戸者による「酒匂川舟運」はどうなったか。直接の記録は未発見だが、翌十二年に江戸商人が酒匂

解説文 覚(第三史料)
 一酒匂川より御厨へ之川舟願之訴訟人有之候付、去ル比皆共方より障有之候口上書、村々より出シ申候。就夫又右之訴訟人共願候ハ、障有之村々ハ難儀無之様、相對而遂相談見申度由願申候。定而近々其村々へ罷越可致相談候間、幾重も致相談不苦。相談相究候ハ、其分村々より又々口上書いたし可指出候。尤先日之口上書ハ障有之趣書出し、今又宜敷相談有之候て、変替へる口上書難指出存候者も可有之候得共、其段者相談之品より、遍んかへ候口上書、指出候而も不苦候間、左様相心得障無之様、相談仕候ハバ、其趣書出シ可申候。尤 井掛り之村々へも、近村より可申通候。以上
 十月八日 下川丹兵衛
 阿辻忠右衛門

◆だが酒匂川舟運は実施された
 元文元年(一七三三)に幕府が道中奉行

川新田開発を企て村むらの反対にあう(村山家「御用留」・「年表小田原の歴史」)事件や、元禄地震・宝永の富士山噴火・酒匂川大洪水等が重なり実現しなかつたらしい。宝永・正徳期(一七四一、二)には茶荷物駄賃記録が田代家に沢山残っている。矢倉沢村の団結のエネルギーは村起しに向かつたらしい。「峠通り」という近道ルートの開発、御関所の地元を生かすなどで村は盛んになった。寛永(一六四一)からの二〇〇年程の間は戸数が三七から七九へ倍増した。同じ期間に宿駅・継立場と古い歴史をもつ関本村は、七三から六五に減っている。

① 今回の出願者は「岸村市場」であるが、「沿岸の市場のある村むら」と理解すべきなのだろうか。
 ② 荷揚場は、徒歩渡ししの時期は今井村堤防、仮橋の時期は網一色村新田で、酒匂川の渡しを優先する。
 ③ 客は乗せない貨物舟である。等々の特色を持ったものであった。
 そしてこの出願者が「岸村市場」であることは、災害復旧を住民の手でという気運が官・民双方に熟して来たことを物語る事として興味深い。
 また、文化十三年(一八三三)に小田原藩国産方が竹之下村(小山町)から小田原への「通船」計画による川渡いを実施した第五史料(「御殿場市史」3P三二外)があり、上流の積込み河岸が判明する。
 さらに、明治六年(一八七三)池上村(小田原市)宮内太次兵衛等による本流と用水路をつなぐ通船計画も進行している(南足柄市怒田高橋家文書外)。
 以上酒匂川の舟運について、駆逐で述べ来た。研究史から視野を広げれば、問題点も多い。しかし先人たちは困難な歴史的条件下で、流水のエネルギーを舟運だけでなく災害復旧から水車・芋車まで極限活用してきた。今日流水のエネルギーは忘れられている。省エネや町起しでも活用したいものである。

片岡日記

23

片岡永左衛門

大正十四年一月

一日 晴

山色連天

かきりなきそらにつらなる
鏡山かわらぬ御代の色も見ゆ
らむ

年の始に

去年はまた荒にもかたも家建
て 御旗にきあふ年の始に

新年梅

こそはまだつぼみなりしを梅
の花恵ましくもさく年の始に
午後より上京親一方一同無事。

二日 晴

明治神宮に参拝

煙草吸う煙りも見辺す神園ハ
かたしけなさの心のみして
午後より親一淳子三人にて浅草
二行人出甚夕多し。

三日 晴

親一小田原に行く。芝より神田
辺を廻り夕刻帰宿。

来し年も三日とすきぬ今更に
おかしきはかりをとめかけぬ
る

四日 晴

前田眼医に行き夕刻帰宿。

五日 晴

正午横濱高田二至る。午后小供
二人と村岡の天神二参詣。

今日卯の日ふくを求めてつと
ひ来る神の宮居に我もぬかつ
く

六日 晴

十時横濱より乗車藤沢本店二立
寄 五時半帰宅。夜に入り所々
よりの来状に返書出す。

昨日天神境内にて

花またき梅の木末を見あくれ
ハ夕日うすれて寒き風ふく

七日 曇

九時出勤。午后ハ腹痛にて平臥。

雪もよる空は曇りて風寒く
火桶のもとに 日を暮らしけ
り
加奈子にせかまれ老妻ハかるた
をよむ。

せかまれてよみ始めたる歌か
るたかすれし声を予らは笑辺
り

り

八日 晴

藤沢に行 知事の行動二面白か
らす帰宅。向笠十東京より来る。
心入りの品々貰ふ。夜二入り西
尾助役ヲ往訪帰途尾崎二立寄藤

沢二電話す。たけ、昇を抱き来
合初て見る産後の糞も無きを悦
ふ。

此親子を見て□二

五月雨のつゆけき空の ほと
ときす血になく声と知る人や
たれ

よそにのみ見てや過ぎなむ梅
の花垣まをもるる風ぞ薫れと

九日 晴

耕地整理ノ件にて役場二立寄出
勤。午后尾崎にて行用にてきく
に逢ふ。自業自得といえども震
災後めつきり糞しを見てハ哀愁
の情に不堪。

思ひやる心もつらし置霜に
やつればはてたる庭の茶山花

十日 晴

昨夜よりの雨はる。

晴れつ、きほこりにあせし松
の葉も洗てはるる今朝のはる
雨

折にふれて

慰る妹か心のいちらしく
た辺ぬ思に 今日も暮ぬる

昨日植木や清吉七才になると云
子供つれて年首に来る。私も先
年より種々御世話様になり高等
小校にて御入れ被下しを親の心
得違にて無断に退校さ世多りい
たし来ヲ御報恩ハ出来さるも御
恩ハ忘れませむと云迎るを聞て
ハ報恩せられたるよりも心よ

十一日 晴

本店に行、四時帰宅。

十二日 晴

午前支店に出勤午后在宿。淳子
東京より帰る。

あゆみ行く下駄のねさむし冬
の夜の氷りはてたるさとの中
道

風落も軒端に月のかけさへて
霜夜の床に ひ、く下駄の音

十三日 晴

本店二行。今日ハ幾分か曙光も
と思ひしに遅々として好音と得
す空しく帰る。

日たまりハ梅のつほみのふく
やかに青きうてなの色もなつ
かし

十四日 晴

今日所勞にて閉居。夜二入親一
東京よりか奈子連れ来泊。

求め来し懷爐よみせし母とし
の昔をしのお夜半の寒さに

松原神社の祭典にて太鼓の音遠
く聞ゆ。

産神の祭の大鼓音さへてたし
引く人の声ぞ賑はふ

十五日 晴

今日も半日平臥。親一か奈子帰
京。

ありとしも思はぬ庭の植込に
赤くうれたる口なしのみの
実の赤く霜にうれたる口なし
の云ねと色に安らわれたり

十六日 晴
平臥。

十七日 晴
今日も平臥。

十八日 晴
沼田頼輔先生来訪。史談長時間
夕食して茅ヶ崎に行かる。

十九日 晴
本店に行く帰途茅ヶ崎茅ヶ崎館
二沼田君ヲ訪問閑談夕食ノ地走
となり九時帰宅。

廿日 晴
本店決算会議二行止宿ス。

廿一日 晴
四時藤沢より帰宅。
沼田先生之来るかと待て
必ずと契りハせぬと日曜に
もしやと今日八日を暮しけり
折にふれて

鳥のなく声もきこへぬとつ追
ひつ結はぬ夢の思ねのそこ
口なしの実を云ねとも色にハ
出る植込の 木陰に赤き口な
しの実の

冬 暖
冬なからまるとに日影のあた、
かく畑うつ鍬の音ものどけし

廿二日 晴
十時出勤来行之預金者二面會二
時帰宅。夜入り中田弁護士 見
舞之来りし礼に行キ来ル七日裁
判所新築祝宴ニ付談話ス。

咲く梅に垣のみとりも埋も
れて
隣りへたてぬ花のひと色
捨てまたひろいても見る□り
つかにか免にさしたる梅の折
枝
曙の桜を思ひて

咲もよし散も吉野の山桜
いつれ辺多てぬ花の曙

廿三日 晴
十時半発にて本店に行。六時帰
る。

ひき渡す繩にかけたるほし大
根ひとときわ志ろく暮るる庭さ
き
夕日かけかたあかりしてむき
畑を打たひ毎に光る鍬さき
鈴ふりてかたにかつける豆腐
桶たがる夕日のかげのかがや
く

廿四日 晴
銀行整理方針に付、神奈川知事
ト意見ヲ異ニせしか、此程来知
事ノ意も動キ来り此分にてハ船

頭ヲ得ラル可ク左スレハ一定の
方向ニ進み走ス船も港ニ着ス可
し。

廿五日 曇
十時半発にて藤沢二行。午后よ
り百株以上ノ大株主會ヲ開會休
業ニ関スル経過整理の方針決算
之総意等附儀セシニ殆ト異議ナ
ク原案決し十時半帰宅。

懐爐ニ夜具もあたたまり床
ニ安臥して
入置きし懐爐にとこのあたた
かく我世の春もゆ免にやわみ
む

廿六日 晴
出勤帰途岡田医師立寄。

廿七日 晴
出勤帰途歯科医立寄。

廿八日 晴
午前八時発にて上京沼田頼輔氏
二面會四国雜記標註を借り四つ
谷親一方に止宿。

廿九日 曇天
午前仁天堂ニ書籍ヲ求メ眼鏡店
ニよる。今日殊に寒し。

手袋をはめても寒し空くもり
日かけも見へす都大路に日の
かけもなし
雪もようなれハ 俄ニ午后帰宅
す。

三十日 雪
今朝起出れハ大雪ふる。
晴れつ、き井水もかるく此こ
ろを今日免すらしき大雪のふ
る

三十一日 晴
本店に行 小田原ハ昨夕より雪
も解初免 今朝ハ道路にみさり
し。藤沢ハ末ニ雪そのま、なり。
十時帰宅。

(つづく)



寸志という言葉の変容

南里 哲

隣家の壁の塗り替えで、職人が「迷惑をかけるから」と挨拶にやってくる。昔ならその家主がやってきたものだが……。時代が変わったというのだろうか、都市化しというのか、「隣は何する人ぞ」式のお互いに話し合う機会が減ったためだろうか。ともかく人間関係が希薄になったことはいなめない。

挨拶は勿論、手ぶらではない。タオルを持って来た。よく見ると包紙に寸志とあり、下にゴム印で会社名が記されているではないか！

ところで私たちは、寸志とは、目下の者に対して気持を抑えて記すものと教えられてきた。

寸志の使い方がどうも変だと幾つかの辞典を調べてみたが目下の者に対する贈物であると記しているのは全くなかった。

したまでの進物。心ばかりの贈物。③自分の志の謙称。寸意。寸情。寸心。(『広辞苑』)

同工異曲というか、これもこれも全く同じ意味合いである。そのような筈はないと、今度は作法の本を調べた。

出ているのではないか！

世話になったお礼に使用する言葉「薄謝、御礼、寸志」が列記されていて、寸志には「目下に対しての心づけの意味」が付け加えられていた(『作法と交際百科』編集・発行 主婦の友社)。

ようやく、我が意を得たりというわけで、目指す解釈に出会ったのである。

この本の発行年月は、昭和三十八年九月とある。いまから四十年たらず前に出ている本である。

しかしよく考えると、この四十年間の移り変わりにはめまぐるしいほど時代の変化がある。価値観も大きく変わったものもある。

近頃、よく「目線の高さから人を見る」という言葉に接することがある。お高く止まってはならない、と云う戒めの言葉であろうか。そこには寸志の意味に変容があるのではないか？

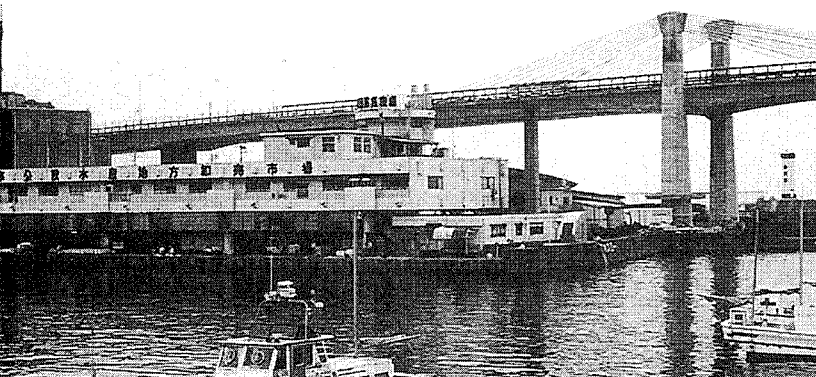
漢和辞典・国語辞典に、寸志には自分の気持ちをはりくだった意味をみな載せている。

その解釈をよく吟味す

ると、目下に対しての心付けの言外の意味が含まれると解せないことはない。

だが言葉は時代と共に生きている。経済の高度成長に、より貧富の差がなくなった現在、なにごとも平準化の傾向の時代、上下の差を考えずにそのまま解釈したのが似合うのではなからうか……。

- ①僅かの志。己が意志の謙称。寸意。寸衷。②心ばかりのお礼。進物の包紙の上を書く語。(『大漢和辞典』)
- ①わずかばかりの、ころろさし。少しい気持。また、自分のころろさしをへりくだつていう語。寸志。寸情。微意。②心ばかりの贈り物。ささやかな進物。また、少しばかりのもてなし。自分の贈り物や持てなしをへりくだつていう語。薄謝。
- ③誠意のあふれたちよつとした行為やことば。好意の一端。厚情。④ちよつとしたさしさわりの。また、ちよつとした疑問の気持。(『日本国語大辞典』)
- ①いささかの志。②わずかの志をあらわ



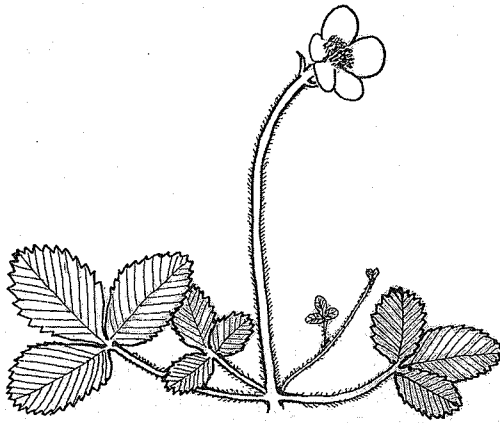
丹沢の植物

④9

城川四郎きがわしろう

シロバナノヘビイチゴ (ばら科)

Fragaria nipponica



筆者原図

丹沢に出かけるとき、麓の里歩きのと きからい ろいろなイチゴ類に出会 う。ナワシロイチゴ、ク サイチゴ、カジイチゴ、ヘビイチゴ、ヤブヘビイチゴ、里を離れて林道にかかるとフユイチゴ、キイチゴ、クマイチゴ、エビガライチゴ、登りにかかるとニガイチゴ、バライチゴ、ミヤマフユイチゴ、尾根の近くではクロ

イチゴそして尾根歩きで運が良ければシロバナノヘビイチゴと対面できる。今回ご紹介するのはそのシロバナノヘビイチゴである。葉が三枚ずつで、基部からランナーを出すのはヘビイチゴと同じであるが花は白く、萼は小さい。名前からはヘビイチゴの仲間のように思われるが、実は少し縁が遠くてオランダイチゴ

の仲間にはいる。あつうわたしたちが買って食べる市販の苺がオランダイチゴである。それと近縁だということがわかればおいしいだろうと見当がつく。残念ながら果実が小さいのでたくさん生えている群落を見つけないれば味がわかるほど食べるわけにいかない。シロバナノヘビイチゴは関東地方、中部地方の亜高山帯から低山帯上部(温帯)にかけての林縁の草地に生える。神奈川県では丹沢だけに産し、箱根には分布しない。丹沢でも、広く分布するのではなく、姫次原、鍋割山稜、三國山などに限られている。だから、おいしくても食べないで大切にしたい植物の一つである。 どうしても山の苺が食べたい人はキイチゴ(モミジイチゴ)の実が熟する頃を見計らって出かけよう。採り放題、食べ放題。ただし刺でシャツを破っても恨みっこなしである。

(つづく)



休日の早川漁港

自民党を変える。日本を変える。

比例代表は「自民党」におまかせください。



自民党
www.jimin.jp

自民勝利 与党過半

参院選

民主、改選数を確保

自由健闘、共社不振

「連立で改」
首相表明 総郵

改革にかけた岸
猶予



与党	野党
71	33
自民 61 (81) 非改選 46	民主 22 (22) 非改選 33
公明 10 (13) 非改選 11	共産 4 (8) 非改選 15
保守 0 (0) 非改選 4	社民 2 (7) 非改選 5
	自由 5 (5) 非改選 2

参議院選 33議席

民主 22 (22) 非改選 33
共産 4 (8) 非改選 15
社民 2 (7) 非改選 5
自由 5 (5) 非改選 2

公明 10 (13) 非改選 11
保守 0 (0) 非改選 4

自民 61 (81) 非改選 46



民主党 河野洋平
小林ゆたか
河野洋平
自由民主党参議院 神奈川選挙区支部

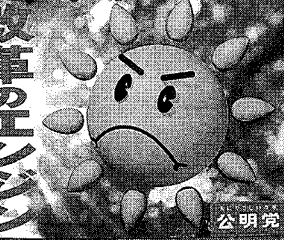
福祉、くらしを
応援する
政治へ

日本共産党

憲法9条を生かす
国づくりを

日本共産党

改革のハム!



公明党

ごあいさつ

永い間のご愛顧、誠にありがとうございました。
十字屋クロスステイ小田原店は、8月19日(日)を
もちまして閉店させて頂きました。

皆様にご支援、ご愛顧を賜り
誠にありがとうございました。

社員一同厚く御礼申し上げます。

閉店後のお問い合わせは、十字屋本社総務部
03(3806)4251までお願いします。

店長

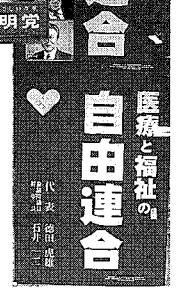
地下鉄 新鮮 閉店セール

お買得情報




医療と福祉の
自由連合

代表 鈴木 卓雄



閉店SALE

50% off

50% off



家具店

あす14日スタート24時間営業

9月30日



新刊紹介

◇小田原市史

通史編 近現代
編集・発行 小田原市

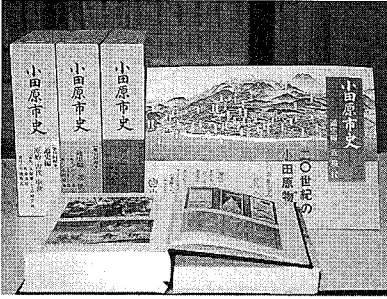
頒価 A5判 二〇六ページ
六〇〇〇円

送料五二〇円

通史編は原始・古代・中世、近世と今回の近代の三冊で完了、これまで刊行された資料編全九巻と併せて、小田原の歴史を通読することができるようになった。

近現代の内容

明治四年(二七二)の廃藩置県から昭和二〇年(二五五)の敗戦迄と、敗戦後から、平成十二年(二〇〇〇)迄の、およそ一四〇年足らずの小田原の歴史を、



近代と現代とに分ける。小田原には、個性あふれる近現代の足跡があるが、同時に日本の同時代の全体史の一環であることを、意識して記したとある。

バランスよく纏められており、特性ある小田原の近現代を個々に閃かしながら、日本の同時代史の中に収束しているのは流石である。

本書は小田原市内および近隣の書店に於いて販売されている。

郵送希望の方は、左記まで送料と合わせ現金書留で申し込まれるとよい。

〒二五〇〇〇〇

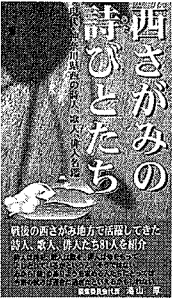
小田原市城山四丁二二
小田原市教育委員会図書館市史編纂担当係

◇西さがみの詩びとたち

編集・発行

西さがみの詩びとたち
編集委員会

頒価 新書判二五ページ
一二五〇円



発売所 小田原駅前

八小堂

戦後の西さがみで活躍してきた81人の詩人、歌人、俳人たちを紹介する。企画の中心は、播摩晃一氏である。氏は、『西さがみ庶民史録』年三回の発行を続ける他に、主として西相模の文芸を中心とした書の発行を続けており、その文化的活躍に敬意を表したい。



◇史談足柄

第39集
二〇〇一年四月

編集・発行 足柄史談会

調査報告
足柄峠と地藏堂・矢倉

沢 調査研究部
武田氏と西相模研修会に

参加して 渡辺 治美
市内史跡探訪(飯沢・

狩野) 杉田 美代子
能登の神社、寺院を訪

ねて 古屋 達夫
金太郎橋と地藏堂ト

ン
ネル 石村 豊
能登紀行 関田 昇

京都府大江町とその周
辺の金太郎伝説

笠間 吉高

黄金塚古墳出土単龍頭

太刀柄頭 岩本 宜明

◇時空

第18号
二〇〇一年七月

頒価 五〇〇円

発行人 鈴木 一正

発行所 時空の会
〒三三六〇二六

横浜市金沢区谷津町空
一―二〇一 鈴木一正方

ある結婚式での江藤淳
小林えつこ

夏芙蓉の人
―随想・中上健次―
河林 満

「中陰」の思想と半生者
について 大島エリ子

「織田作之助最後の女」
北山 慈雨

「青山学院」(二)
菊田 均

淵上毛銭参考文献目録
―昭和14年―

平成12年―
鈴木 一正

淵上毛銭収録作品目録
―文学全集・アン

ソロジー等―
鈴木 一正

北村透谷参考文献目録
(20)―平成12年―

鈴木 一正

小田原史談会行事

◇第二回 史跡めぐり

報告

松田・大井・秦野方面

【日時】
六月八日(金) 九時〜十五時四〇分

【コース】

小田原駅前―寒田神社―
最明寺―三嶋神社(昼食)
―波多野城址―実朝公首
塚―小田原駅前

【参加者】曾我保夫、吉
池清、岡部忠夫、勝俣淳
一郎、山口新平、脇松雄、
剣持芳枝、山口廣子、河
合多美江、高田ヒデ、湯
山浩二、和田治助、安藤
峯三、安藤繁美、中野恒
郎、中野文子、本多孝三、
内田雅廣、内田幸雄、額
田好男、小林房子、田中
恵子、植村擴子、谷津倉
保、大木充由、湯川玲子、
蛭間節子、澤地英、佐久
間俊治、植田博之、植田
尚美、伏見弘、府川登喜
男、府川宏江、杉崎英吉、
笹田昌郎、佐宗正雄、府
川正

(敬称略・順不同)

特別賛助会員

智恵袋 相田酒造店
 小田原銀座 アオキ画廊
 熱海 アオキクリニック
 飛多魚屏
 紳士服のアメリカヤ
 (株)アルファ
 伝統工芸 石川漆器(株)
 税理士 石原和夫事務所
 伊勢治書店
 伊豆箱根トラベル小田原営業所
 画材 ガクブチ ヲウエ
 自動車修理 板金塗装 一マン
 かまぼこ
 株式会社 小田原魚市場
 小田原ガス
 小田原市農業協同組合
 小田原報徳自動車
 株式会社 オートセンター・スギヤマ
 オリオン座
 かまぼこ籠 清
 JA神奈川信用
 カネボウ株式会社小田原工場
 神尾食品工業株式会社
 木地挽 日下部産業株式会社
 かみやま小児科クリニック
 興電社
 小伊勢屋
 国府津館
 (有)小松石材店
 さがみ信用金庫
 趣味のこぶく さくらい
 正栄堂

箱根湯本温泉 春光荘
 雀のお宿
 小田原 冬 芳考のかまぼこ
 辰寿堂スポーツ
 大営不動産
 高木整形外科医院
 刊うとん 小田原城趾前 田毎
 網元直営 交る海
 そびそ二宮
 茶半家具株式会社
 ちんぎょう本店
 角田ガクブチ店
 東京電力(株)小田原営業所
 株式会社 東華軒
 トーホー建物 齋
 鳥かつ樓
 和菓子 菜の花店
 八小堂書店
 八子マサ
 平井書店
 (有) 古屋花店
 株式会社 報徳
 建築金物(株)星崎仲吉商店
 家庭金物
 本多時計店
 * 可 松坂屋
 学生専科 丸 マルク
 諸星運輸グループ
 曾我の梅子 美の政
 榊幸・かまぼこ
 みみづく幼稚園
 ワオマサ株式会社
 錦通り 山口菓子舗
 防災器具 優光社

第4回史跡めぐりご案内
“足助・明智・岩村方面へ”

日時 11月8日(木)～9日(金)
 1泊2日
 集合 小田原駅前(東口)
 午前6時20分 雨天決行
 日程 8日(木) 駅前＝東名高速
 ＝足助八幡宮…香積寺…
 足助中馬館他
 9日(金) ホテルー明智町
 日本大正村 大正資料館
 ＝岩村町(昼食)…伝統
 的建築保存地区…岩村城
 址他＝駅前(19:30)
 宿泊地 茶臼山塩吹館
 (TEL0260-28-2340)
 会費 25,000円
 受付 10月30日(火) 午前9時より
 伊豆箱根トラベル小田原
 営業所

初詣ご案内“東京”

日時 平成14年1月19日(土)
 集合 小田原駅(東口)
 午前6時50分 雨天決行
 日程 駅前＝東名＝湯島聖堂・神
 田明神＝湯島天神＝麟祥院
 ＝靖国神社(昼食)＝市ヶ
 谷記念館＝皇居東御苑＝駅
 前(18:45頃)
 会費 5,000円(含昼食代)
 受付 1月8日(火) 午前9時より
 伊豆箱根トラベル小田原
 営業所

小田原史談(年四回発行)

創刊昭和三十一年一月

定価五円

振替

年会費 普通会員二千円
〇〇二〇二六四三三六